

我が生い立ちの記

—天国の母に捧ぐ—

安部 和美



目次

帰省	4
母の思い出	24
中野の思い出	103
三成の思い出	136
『我が生い立ちの記』にそえて 安井杲重	194
あとがき	200

帰省

昨年（平成19年）12月に職場を退職した私は、故郷島根へ帰省し、かねてからの念願だったお墓参りをついに果たすことができた。

平成20年4月20日から4月23日まで3泊4日の日程で東京駅発6時50分、のぞみ号にて46年ぶりの帰省の途についた。小学校からの同窓の友、範子さんと滋子さんも私を見守るかのように一緒に来てくれたのでとても心強く、心安らかな帰省の旅だった。

岡山で伯備線の特急やくもに乗り換え、生山駅で降りると範子さんの弟の山田さんが車で迎えに来てくれていた。車に揺られて約50分、懐かしい我が故郷三成に着いた。

三成の町の建物や町並みはすっかり変わってしまったが、周りの山々や斐伊

川の流れの清らかさは、昔と変わらなかった。

三成では、懐かしい友が温かく迎えてくれて、車酔いをした私もすぐに元気を取り戻した。友としばらく歓談した後、すぐに石原の伯父・伯母のお墓参りに向かった。今は誰も住んでいない石原の家の玄関先で、一緒について来てくれた友と写真を撮った。知らぬ間に友も私も童心に返り雑草の生えた庭ではしゃぎ回っていた。

小学校1年生入学の時から中学校を卒業するまで私を育ててくれた伯父・伯母のお墓に一刻も早くお参りしたくて一人先にたつて山に向かった。昔の記憶をたどりながら細い坂道を上って行った。急な坂道を上りつめ、お墓にたどり着いた時は、ジーンと胸が熱くなつて「伯父さん、伯母さん和美が参りました。長い間お参りできなくてごめんなさい。」と心の中で詫びた。そして何よりもありがたく、うれしかったことは範子さん、滋子さんと三成に住んでいる同窓の友の美征さん、そして石原まで車で運んでくれた範子さんの弟の山田さんが一緒にお墓に参り、水を取り替えたりお花をたむけたりしてくれたことだった。寂しかったお墓の周りが急に明

るく、にぎやかになりお墓の仏様がとても喜んでおられるように感じられた。そして長年の思いをやつと叶えたという安堵感と満足感にひたることができた。帰り道、ゆつたりとした気分で周りの懐かしい野や山の景色を眺めていると、何とも言えないすがすがしさが胸いっぱい広がってきて心が洗われるような気分になった。ちようど石川啄木がふるさとの山を見て歌ったように。

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

帰りの坂道の側の野にわらびが群がるように生え出ているのを範子さんが見つけ、はしゃいで摘み始めたのでみんなも楽しそうに手伝って摘んだ。お墓参りのご褒美に仏様が下さったような気がしてうれしかった。

夜は、三成駅前の川芳旅館にて夕食会の席が設けられた。これから農繁期が始まろうとする忙しい時期にもかかわらず、ふるさとの友が11人も集まってくれて懐かしい談話のひと時を過ごすことができた。

夕食会の最後に歌った仁多町歌は、懐かしい友と48年ぶりに再会し、語り合えた喜びを胸に、感謝を込めて元気いっぱいに歌った。

再会の喜び込めて

ふるさとの友と歌った

仁多町歌

仁多町町歌

作詞 萬羽きいち
作曲 長岡 敏夫

1. さわやかな朝のひかりに 猿政の峯はかがやく
仰ぎ見る希望の町よ おおここにおおここに
人の和の花はひらきて らんまん 仁多は栄える

2. 野のめぐみ山のめぐみに たくましき汗をたたえて
きおい立つ方の町よ おおここにおおここに
生産の歌は響きて 高らかに仁多は脈うつ

へ 間 奏 へ

3. 斐伊川の清きながれに 吹く風もみどりゆたかに

夢を呼ぶ光の町よ おおここにおおここに

土かおる文化おこして とこしえに仁多は伸び行く

今回は、東京で会うことを約束し、みんなで「ふるさと」の歌を歌って散会した。友との再会の喜びと感動はまだまだ冷めやらぬまま私の心を温めている。

翌日、21日は三成駅午前9時30分発の木次線で一人、木次へと向かった。

高校時代の3年間、お世話になった木次の川本の叔父・叔母のお墓参りと小学校入学まで私の面倒をみてくれた三刀屋町坂本（以前の飯石郡中野村）の伯父・伯母のお墓参りをするためだった。

30分ほどで木次駅に着いたが、駅前には高いビルや三刀屋方面につながる広い道路もできて、やはり昔とは様子が変わっていた。しばらく立ち止まって昔の道を思

い出し、確かめながら歩き始めた。

木次駅から歩いて5分ほどのところに川本医院がある。そこで私は高校時代を過ごした。母の妹の叔母は、私をいつも「和美さん」「和美さん」と呼んでは、おやつをくれたり、一緒に散歩に連れて行ってくれたりとても優しくしてくれた。叔父は医者で、ほとんど顔を合わせることはなく、あまり話したこともなかったが、私のことを気に留めていてくれたようだ。叔父は横田高校に入学が決まっていた私を、当時小学校4年生だった娘の勉強をみながら、自分の家から三刀屋高校に通うようにと三成の伯父に頼んだのだった。その時、私は、高校入学前の春休みを坂本で過ごしていたので、横田高校から三刀屋高校への転校の手続きが取られていたことも知らずにいた。昭和35年当時のことなので、電話はまだ一般家庭に普及しておらず、坂本の家にも電話はなかった。

そんなある日、坂本の隣の家から私に電話との知らせがあった。隣の家には掛合の役場に通う息子さんがいたので電話が付いていたのだろう。「高校は、木次の川

本から、三刀屋高校に通うことになった。転校の手続きはもう済ませてあるからそう心得ておくように。」という三成の伯父からの電話だった。今まで慣れ親しんだ三成の地を離れ、不慣れな川本の家で生活するのだと思うとちよつと不安だったが、そうするしかなかった。こうして私は、昭和35年（1960年）4月、三刀屋高校に入学し、3年間を木次で過ごした。

私が高校に入学した時、小学1年生だった従弟が今は医者になって来院する多くの患者さんを診察している。夫婦共に病院の仕事で忙しい時間なので、ちよつと立ち寄つて挨拶を済ませると、すぐ墓地へと向かった。町の様子も昔とは変わつていたが、町の後ろの高い土手の上にある桜の並木道は昔のままだった。懐かしくて歩いてみたい気持ちだった。

従弟が墓地への道順を記したメモを渡してくれたし、高校の頃、何度か行つた記憶があつたので、町の通りを少し上つて行くとすぐ墓地を見つけることができた。

お墓はきれいに掃除され以前にきた時と変わらない様子だった。お花とお線香をお供えし、叔父・叔母のことを思いながら墓前で長い間手を合わせた。

帰りにお墓参りに行く時に寄ったお花屋さんで、もう一度お花を買って木次駅へと向かった。11時30分に坂本の家から車で迎えに来てくれることになっていた。私が高校生だった頃は、木次から三刀屋まで20分おきくらいにバスが往復していたと記憶しているが、今は午前中に2回、午後2回しかない。三刀屋から掛合方面に行くバスはなくなって広島行き的高速バスが通っているだけだということだった。

坂本の家には、高校1年生の時、村の神社の秋祭りに行ったことがある。坂本の伯母は、私が中学1年生の時亡くなってもういなかったが、三成の祖母の実家から坂本に嫁いだ杲重（たかえ）さんが、木次の川本の家にいる私をお祭りに呼んでくれたのだった。その時伯父はまだ元気だった。客間でご馳走をいただいている私のところに時々顔を出しては、私の幼い頃のことを懐かしそうに話していた。

木次の駅のベンチにこしかけて待つっていると、ちょうど11時30分に杲重さんが入ってこられた。もう70歳を過ぎているのに顔はつややかでとても元気そうである。杲重さんは、私を懐かしそうに見ながら手を握り「和美さん、変わった。」と言われた。高校1年以來の48年ぶりの再会だから、変わったのは確かだが、年を重ね「変わった」と言われるほどに老いてしまったのかと思うと内心一抹の寂しきを感じた私だった。車は、杲重さんの息子さんのお嫁さんが運転して来られた。昔は三刀屋の町の狭い道路を車が通っていたが、今は、町の横にまつすぐ通り抜ける広い道路ができていた。外の景色を見ているうちに、あつという間に家に着いた。木次駅を出発してからまだ15分も経っていないので驚いた。昔はバスで木次駅から三刀屋まで行って三刀屋から掛合行きのバスに乗り換え、下多根という停留所でバスを降りてから、道路の横の土手を下り三刀屋川にかかった橋を渡って10分くらい歩き、家に着くまでに1時間ぐらいはかかったように思う。今は木次からまつすぐに道路ができて家のすぐ前を国道が通っているのだ。もう茅葺き屋根の家は1軒も見当たらない。

坂本の家も外観は、すっかり変わっていて、私一人では、訪ねて行けそうになかった。家の中も改造されていたが、表側の部屋は以前とあまり変わっていないかった。私は、懐かしさでいっぱいになった。仏壇の前に座り、まず、来訪の挨拶をした。金色に輝く大きな仏壇は昔と変わることなく厳かにそして優しく私を迎えてくれた。

昼食にいただいた竹の子と蒨（ふき）の葉の煮物は、昔食べたあの懐かしい味だった。そのおいしさにますます食欲をそそられた。

昼食後、私は坂本の家の周りをぐるっと周り、裏の山の方に行って見た。幼い頃、近所に友達のいなかった私は、よくこの山に上って一人で遊んだものである。山の上り口のところには丈の低い椿の木が一本あって春先になると、毎年赤い花をたくさん咲かせた。その椿の枝や葉に触りながら、私はよく話しをした。「きれいな花、咲いたね。」「元氣かね。一人でさみしいないかね。」などと。その椿の木は、今は直径10センチ以上もあると思える太い幹になり見上げるほど丈も高くなっていた。私は、その太い幹をパンパンとたたいて「こんにちは。久しぶりだね。」と挨拶した。

もちろん返事はなかったが、私のことを覚えていてくれたような気がした。竹林の竹も太くがっしりとして空高くそびえ立ち、長い歳月の流れを感じさせた。

家に帰るとお昼寝をされた杲重さんも起きておられて、一緒にこたつにあたって昔の思い出話に花が咲いた。しばらくすると、孫の雄太君がおかあさんの運転する車で幼稚園から帰ってきた。家族の愛を一身に受けて育った人懐っこい元気いっぱい雄太君とすぐ親しくなった。それからみんな一緒にお墓参りに行くことになった。安井家の墓は、家のすぐ後ろにあった。昔は裏の山を少し上ったところにあったが、山の斜面が切り崩されて国道が通ったため、家の後ろの昔は畑だった場所に移されたのだ。お墓には庭の花壇に咲いていたチューリップや水仙の花が手向けてあった。杲重さんは、お墓が近くなったので、毎日お墓参りすることだった。墓前のお花はまだ咲いたままできれいだっただが、杲重さんはその花を取り除けて、私の持つて来たお花を供えるようにと言われた。そしてお墓の伯父・伯母に「和美さんが・・、和美さんが・・と、言っておおなごつたに、今日は和美さんがお参り

に來ましたけんね。」と報告された時は、ジーンと胸が熱くなった。深い感謝の思いで手を合わせていると雄太君が、私の横でなにやらお経を唱え始めた。そして「な
んまいだ、なんまいだ（南無阿弥陀仏）・・」と、おばあちゃんに「もういいよ。」
と言われるまで手を合わせて祈り続けている。誰に言われるのでもなく、当たり前
のようにするその様子は普段の生活の中で自然に身に付いたものであることがうか
がわれ、何とも微笑ましく心温まる情景だった。そしてこんな温かい家族に見守ら
れて眠っているお墓の伯父・伯母は本当に幸せだと思えてうれしかった。

家に帰ると、また、こたつにあたりみんなで和やかなひと時を過ごした。こたつ
の上いっぱい、おやつのお菓子や煮物などが置かれている。それをいただきなが
ら、私は幼い頃覚えている母のことや、坂本の伯父・伯母や三成の伯父・伯母の話
をした。4時頃になると小学4年生の孫娘の香穂ちゃんが学校から帰って来てまた
にぎやかになった。

その夜は、帰省して懐かしい友に会え、念願のお墓参りも無事済ませることがで

きたことを感謝し、幸せな心地で床に就いた。

翌朝、ちょうど床から起き上がった時、香穂ちゃんが「おはようございます。」と言つて入つてきて、すぐ奥の間に入つていった。手には仏前にお供えする炊き立ての温かいご飯の入った器を持っている。仏壇は、私の寝ていた部屋を通つて奥の間にあつたからだつた。「おはよう」と返事をしながら、幼い頃私も同じことをしていたのを思い出した。伯母が毎朝、炊き立てのご飯をご仏前用の器に盛り、私に渡したものを仏前にお供えして両手を合わせたものだった。その習慣が今も受け継がれ続けていることに気付いて昔に返つたような懐かしさを感じた。

家族がみんな一緒に朝食をし、最初に香穂ちゃんが学校へ行く。みんなが玄関まで出て行く。「行つてきます。」「行つてらっしゃい。」とあいさつを交わした後、香穂ちゃんは「おとうさん、おとうさん」と呼んでいる。香穂ちゃんは歩いて学校に通うのだが、家のすぐ前が国道で朝の通勤の車がひっきりなしにスピードを出して走っているので道路を横切る時は、注意して渡らないと危ない。車が少し途絶えた

時に、おとうさんに見守られて渡るのが日課になっていたからだ。香穂ちゃんを見送った後、少ししておとうさんが車で出勤。最後に雄太君がおばあちゃんに見送られて、おかあさんの車で幼稚園に行く。こちらでは毎日、当たり前のように行われていることだが、私にはそれがひとつひとつみな新鮮で、心温まる光景に見えた。

三人を見送った後、もう一度お墓参りをして、お別れのあいさつをした。坂本の家で一夜を過ごし、家族の和やかで心温まる生活を実感した私は安心した心持ちでお墓の伯父・伯母にお別れすることができた。

きょう、22日は、帰省を共にした滋子さん、範子さんと合流して松江観光をする予定になっている。

木次駅10時14分発の列車で松江に向かうため、9時半には懐かしい坂本の家を後にした。来た時と同じように車で木次駅まで見送ってもらったが、途中、三刀屋の

町の中を車でぐるっと一回りした。私の通った三刀屋高校や昔、バス乗り場の待合所のあった場所や三刀屋天神社など杲重さんの説明を聞きながら高校時代のことや、伯母が連れて行ってくれた三刀屋天神のお祭りで迷子になったことなど、懐かしく思い出していた。

木次駅に着くと、駅前で長く駐車はできないので車を降りてすぐお別れとなった。懐かしい坂本の家で、一日ゆっくりと和やかな語らいの時を過ごすことができたことへの深い感謝を込めて、私は車が見えなくなるまで手を振り続けていた。

宍道駅のホームで滋子さんと範子さんに落ち合い、松江に向かった。松江駅は広く大きく変わり、町は道路が広くなり町並みも変わっていたが何となく穏やかで落ち着いた城下町の雰囲気は昔と変わりなく感じられた。

松江には、母の実家が佐草町の八重垣神社のすぐ隣にあるので子供の頃はよく来

たことがあった。今、思い出すのは幼いころ私がまだ坂本にいた頃、母に連れられ、松江から佐草の方に抜ける細い山道の近道を長い間歩いて行つた時のことである。母は私が歩き疲れてべそをかかないように、楽しい話をしたり歌を歌つたりして元氣付けてくれたことを覚えている。

もう一つは、坂本の伯母に連れられて松江に出た時のことである。松江の町を歩いてゐる時、私は果物屋さんの店先に黄色く熟れたバナナが一房並べてあるのを見つけた。バナナが食べたくなつた私は、伯母に「バナナ買って！買って！」とせがんだ。今なら廉価で当たりまえに手に入る果物だが、昭和20年代の頃だから、1本でも相当に高価なものだつたと思う。「ねえ、買って！買って！」としきりにせがんで、そこから動こうとしない私に、伯母は困り果ててしまった。その様子を見てゐる店のおばさんに伯母は、1本いくらするか尋ねた。相当高かつたらしく伯母は困つた顔で、私をあきらめさせようとした。私も事情がわかりあきらめて伯母と一緒に店を立ち去ろうとした時だつた。店のおばさんが後ろから、「半分でもよけれ

ば売りますよ。」と言った。伯母は引き返し店に戻り半分を買うことになった。店のおばさんは店先に置いてあった一房のバナナから一本をもぎ取り、その一本を包丁で半分に切つて私に渡してくれたのだった。伯母は申し訳なさそうに残りの半分のバナナのことを気にしていたようだが、店のおばさんはさつぱりとした声で「売れなきや家の者がいただきますよ。」と笑いながら話すのが聞こえた。その半分のバナナは、如何ほどだったかは知らないが、私はその上等な果物を片手でしつかりと握り、伯母について歩きながら少しずつ皮をむいて食べた。初めて食べたその味は、甘いりんごに似たような味だった。

バナナが欲しくても高価で買ってもらえず、諦めて行こうとする私を店のおばさんは、かわいそうに思い見るに見かねて呼び止め、バナナ一本を半分に切つて渡してくれたあの時のことを今思い出すと、店のおばさんの優しさが伝わってきて、伯母への懐かしさとともに目頭が熱くなってくるのである。

22日の松江観光は、松江駅から徒歩で松江城、小泉八雲記念館、武家屋敷を巡った。いずれも昔のままの風情がそのまま保たれていて、穏やかでゆつたりとした気分になり疲れが癒された。最後に「船頭ですが、船尾にいます。」と自分を紹介した船頭さんのユーモアたっぷりの案内で船を降りるまで笑いの絶えなかった堀川めぐりでその日の日程を終えた。

旅の終わりの日、23日は、朝から安来にある足立美術館に向かった。安来駅からシャトルバスで約15分で美術館に着いた。5万坪の広さのある日本庭園は、5年連続庭園日本一と言われるだけあって、美しい絵画を見ているような閑雅で素晴らしい風景を味わうことができた。館内に展示されている横山大観をはじめ、川合玉堂、橋本関雪、河井寛次郎、北大路魯山人などの作品を鑑賞し、ゆつくりくつろいだ後、タクシーで米子駅に向かった。米子の町も40年前とはずいぶん変わってはいしたが、米子駅前のロータリーや駅の建物を見た時は昔のことがしのばれて懐かしかった。米子駅発15時24分の特急やくもに乗車、帰路についた。岡山駅発17時49分の新幹線

のぞみにて一路東京へ。21時13分に東京駅に到着した。帰省の旅の行きも帰りも滋
子さん、範子さんと共にできて大変心強く、二人の優しさに包まれて心温まる旅を
終えた。

(平成20年5月25日)

母の思い出

母は平成18年（2006年）11月16日、午後3時5分、あそか病院のベッドで静かに91歳の生涯を閉じた。あそか病院は母が東京に出てきて後、助産看護婦として15年間働いた病院だった。法名は釋尼香美。波瀾に満ちた生涯を凜として美しく精一杯に生き抜いた母にふさわしい法名だと私は思う。

母の生家は、出雲の神話「八岐大蛇（やまたのおろち）」で、大蛇を退治した素盞鳴尊（すさのおのみこと）と稲田姫が祀られた縁結びの神社として知られている八重垣神社の生垣を隔ててすぐ横にあった。母は、開業医の父と助産看護婦の母の三男五女のうち三女として生まれた。子供の頃の母は、近所の友達と神社の境内で遊んだり鏡の池に沈んでいる硬貨を拾い上げるいたずらをしたりして遊んだそう

だ。ある日、友達と鏡の池から少し奥に入って山を登って行った時、若い男女の死体を見つけ、驚いて走って帰り近所の人に知らせたそう。その時医者だったお父さんが、検死のため警察の人と同行したという。

お正月には、百人一首のかるた取りに興じ、友達の家で夜を明かして朝帰りをしたこともたびたびあったが、もともと百人一首の大好きだった両親はそれをとがめることはなかったそう。母は、また調剤した薬を包むの手伝ったり、患者さんの履物をそろえたりしてお父さんの仕事を手伝い、10歳以上も年下の弟をおんぶしたり、遊び相手になつたりする気がよく利く優しい姉でもあったようだ。松江高等女学校時代は、短距離走の選手をしていたので練習することが多く、勉強はあまりしなかったという。

このような話は、母が東京に住むようになり、あそか病院を退職した後、私が夏休みや冬休みに韓国から帰って来た時に、母がぼつりぼつりと話すのを聞いて知ったことである。

八重垣美人と言われたという私の祖母は、私が3歳くらいの時に亡くなったのでよく知らないが、祖父のことは少し記憶に残っている。背が高く、頭の髪が真つ黒でふさふさしていて頑丈そうに見えた。私を見てにつこり笑って何か話しかけたようだがよく覚えていない。祖父は84歳で天寿を全うした。看護婦の資格を取った母が床に臥した祖父を最後まで世話をしたそう。その時祖父は、母に子供たちはみんな夫婦そろっているのに美代さんだけは一人なので、いつも気にかかっていたと話したそう。祖父は自分の臨終の時を知っていたようで、子供達を全員呼び寄せるようにと家族に頼み、子供達夫婦が来ると、祖父は目をつむったままでも誰が来たかがわかっていて、一人一人にその人にふさわしい助言を与えたり勇気付けたりしたそう。そして家族全員がそろい見守る中、祖父は、最期に「天下泰平！」と言って息を引き取ったという。まさに立派な大往生を遂げた祖父であった。

私が物心ついた頃は、今の雲南市三刀屋町坂本の伯母（父の姉）の家にいた。当

時の住所は飯石郡中野村大字坂本だったので、私は「中野の伯母さん」と呼んでいた。その納屋に母と兄二人と一緒に住んでいた。母は、草刈りをしたり、畑仕事をしたり母屋に行つて仕事を手伝つたりしてほとんど家にいることはなかった。また、母が食事をしている姿を見たこともなかった。納屋の土間の隅に七輪（土製のこんろ）を置いてそこで母が味噌汁を作っていたのを覚えている。納屋の部屋の片隅に小さな食卓があつて私たち兄妹三人はそこに座つて食事をした。ある朝、母が伯母がくれたと言つて一個の卵を大事そうに握つて入つて来た。それは産みたてのまだ温かい卵だった。母はそれを割つて皿に入れ、食卓の前に座つている三人に「（ご飯の）真ん中に穴あけて」と言つて割つた一個の卵を三等分にしてご飯の上に流し入れ始めた。三人は「そつちが多い」「こつちは少ない」と口げんかして自分が少しでも多いほうをもらおうとしたことを覚えている。その頃中野の家では、雌牛一頭と放し飼いの鶏が5、6羽、うさぎが1羽飼われていた。鶏はたいいてい毎朝、卵を産んだ。母屋の土間のすぐ横にある牛舎の前の敷きつめたわらの上の丸くくぼん

だところひとつかふたつの卵があるのをよく見かけた。産んだ卵は、蛇などに食べられないようにすぐ取って母屋の台所の戸棚の中のかごに入れられた。かごがいつぱいになると卵は売りに出され生活の足しとなった。卵が家で食べられるのはたいていお正月かお祭りの日くらいだったので大変なごちそうだったのである。あの日、母が私達三人に三等分して食べさせてくれたあの1個の卵は、その日の朝鶏の産んだ二つの卵のうちの一つを伯母がくれたものだったであろう。今、あの時のこととを思い返すと、食料事情の乏しかったその当時、母は伯母に分けてもらった1個の卵を自分は口にすることもなく三人の子供達に食べさせて、にこにこしていた母のその愛に切なくなってくる。

秋の収穫時になると、納屋の土間には脱穀機が置かれ、部屋には米俵が積まれた。その時には私達家族は、部屋の奥の片隅に敷かれた畳4枚ぐらゐのところ寝たり、納屋の二階に上がって寝たりした。いつ頃からだったかは覚えていないが、知らぬ間に私は母屋で伯母といっしょに寝るようになっていた。

二人の兄が中野村の小学校に通い始めていた。下の兄が小学校に入学した頃、母に叱られながらべそをかきかき勉強をしていたのを覚えてゐる。私はその側で、それを見ながらひらがなや数字を自然に覚えた。

ある日、季節はいつ頃だったかはつきり覚えていないが多分、春のはじめ頃だったと思う。寒くもなく、暑くもない天気の良い日だった。母は、私を連れて裏山に薪（たきぎ）にするための枯れ木の小枝を集めに行つた。集めた小枝を小さな束にしてそれを背負つて帰る途中、母は急に咳き込むように道端にしゃがみこんだ。私は、驚いて「お母ちゃん！」と言つて側にかけてかけた。不安そうな顔で覗き込む私に母はふりむいて「大丈夫だよ」と言つて立ち上がった。その目には涙があふれていた。私は母のことが最初はちよつと心配だったが、母は先にたつていつものように歩き始めたし、背負つた枯れ木の束も少なくてそんなに重そうにも見えなかつたので内心ほつとして後について家に帰つた。母といつしよに裏山に上つた記憶はその時一度しかない。その時の私には母のあの涙が何だったのか知る由もなかつた。

同じ頃のことだったと思う。ある夜遅く目を覚ますと私は納屋の一階に出してあった。たついで一人寝ているのに気づいた。母は部屋でまだ何か仕事をしていた。いつもなら母屋で伯母といっしょに寝ているはずなのにどうしてここにいるのだろうかと思つた私は、寂しくなつて「おばさんとここに行く、おばさんとここに行く」と言つてむずかつた。母は、仕方なく私を母屋に連れて行つた。伯母の寝ている部屋の前まで送つてくれた母の方を振り返つた私は、目にいっぱい涙をため泣いている母の姿を見た。その時私は、「私が伯母さんと寝ると言つたので寂しかったのかな。」と内心思いながら、そのまま伯母の部屋に入つて行つたのだつた。

母と兄二人が納屋からいなくなったのはその頃だろうと思う。気が付いたらいなくなつていたが、伯母と一緒に過ごす方が多かつた私は母や兄がどこに行つたか尋ねることはなかつた。

母が父の戦死を知つたのは、終戦後3年半が過ぎた頃だつた。戦死の知らせがな

かったので、父はいつか必ず帰って来ると信じ、父の姉の家である中野（坂本）の納屋で暮らしながら、今か今かと夫の帰りを待ち続けたのだった。母はどんなにきつい野良仕事をして、父がもうすぐ帰ってくると思うとぜんぜん辛くなかったという。

父は、三成の町で開業医をしていた。父に召集令状が来たのは、昭和19年の春、父は38歳だった。私は生まれてまだ間もない赤子であり、兄は2歳と4歳の時であった。父は、陸軍軍医少尉として召集され、最初は広島の呉にいたと聞く。出征の前夜、父は自分の診察室に入ってぐるっと周りを見回してからじつとそこに立ち尽くしていたという。そして薬品は箱に入れて二階に上げておいたから子供たちに絶対触らせないよう注意するようにと母に言ったという。父が広島にいる時、母は面会に行ったのだが父は南方出征前の一時帰省が許され、ちょうど三成に向かったところで行き違いのまま会わずじまいになつてしまったそうだ。

父がフィリピンに向かう船の中で書いた手紙にパイアをはじめて味わつたと

書いてあつたという話を母から聞いたことがあつた。母が亡くなった後、遺品の整理をしていた時、母が年金手帳など大切なものをしまっておく缶箱の中から、父の書いたその手紙と茶色に変色し左端の真ん中辺りがちぎれていて「所属部隊」の書かれた部分が、はつきりと全部は読み取れなくなっている父の戦死を知らせる「死亡告知書」なるものを発見した。以下に母に宛てた父の手紙を記してみる。

二十六日午前九時半書

まにらに後五時間余りで到着します。十八日以来船中で蒸し暑くて食欲減退しましたが至極元気ですから御安心下さい。フィリッピンの山々が遠くかすんで左手に見へてゐます。フィリッピンの東側は目下激戦中とのこと、昨夜は敵潜の巢中を気味悪く航海しましたが、御陰様にて無事入港出来相です。台湾では初めてパイヤを味はひました。昨日は船中で久し振りにビール半本づつ配給がありました。入浴は勿論洗面も出来ず身体がねとねとして困り

ましたがビール半本で人心地がつかまりました。まにらで当分下船それから先、行く場所が未だに不明です。この手紙は好便あり広島より投函して貰います。行先が分つたら、を打って通知しますが委しいことは書けません。赤道に段々近づき船中が益々暑くなって来ました。船は東方に向き一直線にまにら湾を走ってゐます。海水も紺青色に光ってゐます。

薬品は先では大変手に入り難くなりことにモルヒネ、サルバルサン等手に入らなくなるから大切に特に毒薬は危険ですから必ず出せぬ様に箱に入れて釘でも打ってしまつて置いて下さい。先ではまだまだ入手困難になりますから。二階梯子段は危険ですから特に薬品の置いてある反対側からでも落ちたら大変だから二階に上がらせぬ様注意して下さい。トランクは佐々木さん所に置き手さげを買つてこちらに来ました。トランクと防水マントを佐々木さん所に置きました。仁多に帰るとき持つて行ってやるとのことでした。磯田は居ますか。来年の四月になると一人になるので石原からでも出て貴子様

何れ頼みます。

呉々も御身体御大切に。子供に気をつけて下さい。

父上母上によろしく。又加藤先生、糸賀さんにも、林三郎さんにもよろしく。

十月二十六日

富之助

島根県より出た同方向に行く友達の住所を知らせて置くから連絡お互いにする様に

木島一英、奥様は多喜子様 邇摩郡静間村 電 鳥井十番

山城貞治 奥様 美津子様 安濃郡太田町 電 太田六十三番

医師会名簿にもあり。

父の出征後、母は三成の町で三人の子供の世話をしながら家を守って暮らしていた。それから約1年が経った昭和20年4月、三成の町は大火災に見舞われた。

空気が乾燥し風の強い日だったので、一軒の家から出た火はみるみる燃え移って広がり、風下の方にあつた家屋はほとんどが全焼してしまった。みんながあわてて家財道具などを近くの田んぼや畑に運び出したそうさ。母もみんなに手伝ってもらって家財道具など運び出したそうだが、火事が収まった後見たら、出したものはほとんど残っていないかつたそうさ。火事泥棒に持つて行かれてしまったのだった。

住む家も家財道具も無くなつてしまつた母は、とりあえず三人の子を連れて石原の自家の納屋にいた。一歳を少し過ぎた私を、私より一つ年上の自家の男の子が棒を持つて追いかけて、私がちよこちよこ走つて逃げ回つていたそうさ。

その後、母と子供三人の中野（坂本）の納屋での生活が始まつたのである。

話は中野の納屋で父の帰りを待つ母の話に戻る。

太平洋戦争が敗戦で終わり、出征して無事生き残つた人達が次々と帰つて来ていたが、父は終戦後3年が過ぎても帰つて来なかつた。おかしいと思つた母は、父が

南方に行く船の中で書いて送った手紙に記された同方向に行った友達の医師に問い合わせてみた。すでに戦地から帰って久しくなっている医師は、母の問い合わせに「まだ、通知は受け取っていないのですか。」と驚き、父が戦死した時のことを話し始めた。昭和19年11月13日の朝、フィリピンのマニラ湾でちょうど上陸しようとして甲板に出たところを敵の攻撃に遭った。皆がすぐに避難したが、父は避難場所が悪かったのか爆風で戦死したという。戦死の知らせはすぐに父の頭髮と手の指の爪と共に連絡船で日本に送られたそうである。知らせが届かなかったのは、その連絡船もまた敵の攻撃に遭い、沈没してしまっていたからであった。

母は、父の戦死を、問い合わせた父の友人の医師を通して初めて知ったのだった。「死亡告知書」はその後で受け取ったようである。

母に宛てた父の手紙と一緒にしまっていた「死亡告知書」には、父の戦死について

昭和拾九年拾壹月拾參日午前八時零分 比島マニラ灣 妙義丸内に於て戦死（爆死）せられましたので御通知致します

尚市町村長に対する死亡届出は戸籍法第八十九条により当庁に於いて処理いたします

昭和二十四年一月二十日

島根県知事 原 夫次郎

と記されている。父が母に宛てて上記の手紙を書いたのが19年10月26日だからそのあと1ヶ月も経たないうちに戦死していたのである。父の戦死を通知した日付は昭和24年1月20日、父の戦死からすでに4年2ヶ月以上も過ぎてしまっていたのである。

戦死の知らせがなかったたので終戦後、今か今かと夫の帰りを待ち続けていた母は、夫の戦死を知った時、どんなに辛く悲しかったことだろうとその心中を思うと胸が

痛んでくる。しかし母は、私が休暇で韓国から帰って来た時に聞いたこのような父の話や三成の大火災の時の話などをする時も、いつも淡々としていた。「辛かった」「悲しかった」「大変だった」というような負の感情を表す言葉を一度も使ったことがなかった。母の話には、その時の辛さ、悲しさを乗り越えいつも前向きに精一杯に生きてきた昇華された美しさがあり、まるでスクリーンに映し出された映画のシーンを見ているようだった。

父の戦死を知った母は、悲しんでいるいとまもなかった。三人の子供を抱え、今後どのようにして生きていくかを考えなければならなかった。

その時のことは、母が直接私に話したことはなかった。私が三成の小学校に入学して2、3年経った頃だったと思う。ある日の昼下がりに、三成の伯父が居間の壁に寄りかかりしみじみとした様子で、その時の母のことを私に話して聞かせてくれた。

三成の伯父は、戦時中日本の統治下にあった韓国で公立学校の校長をしていたが、

終戦とともに引き上げ三成の両親のもとに帰っていた。長男である伯父は、弟の戦死を知って今後のことを話し合うため中野にいる母を訪ねた。伯父には子供がいなかった。伯父はその時32歳だった母に「美代さんはまだ若い。三人の子供は私が育てるから再婚しなさい。」と言ったそう。その言葉を聞いた母はとつさに「かわいい子供を置いてなんで再婚なんかできますか。なんとしてでも子供は私が育てます。富之助さんの妻としてこれからも生きていきます。」ときっぱりと再婚を断ったそう。伯父は「お母さんは偉いよ」と最後にぼつりと言った。その話を聞いて私は、一緒に暮らしていなくてもお母さんがいてくれて本当によかったと思い、母の存在の重みに気付かされたのだった。

伯父が中野に来た時、4歳だった私はその人が誰かは知らなかった。ある日庭で遊んでいると、前の田んぼのあぜ道をカーキ色の服を着た男の人がこちらに歩いて来るのに気がついた。私はうちに来るお客さんだと思いうれしくなつてその人の方に走って行った。その人は若いおじさんだったが、私を見るとにっこり笑つて私を

抱き上げ、抱っこしたまま歩いて来て家の庭で下ろしてくれた。そのあとのことは覚えていないが、その人はその日のうちに帰って行ったようだった。その後、その人は優しい軍人のおじさんのイメージとして私の記憶に残っていた。ずっと後に、「中野にいる頃、家に軍人さんが訪ねて来たことがあるか」と母に尋ねてみたことがある。母はそんな人は来たことがないと言った。今思うとその人は三成の伯父だったのだと納得できる。

母は、実家の父が医者で母が助産婦の仕事をしていた環境の中で育ってきたので、看護婦か助産婦になろうと考えその意向を伯父に伝えたようだ。母は実家の父の世話で松江助産婦看護婦学校に通うことになった。私をかわいがってくれた中野の伯父夫婦が、小学校に入学するまで私の面倒を見てくれることになり、母は小学校に通い始めている兄二人を連れて松江の実家に移ることになった。母が私を連れて中野の裏山に行った時に流した涙と納屋で寝ていた私が、「伯母さんと寝る」と言っ

てむずかり、私を伯母の所に連れて行った時に流した涙は、夫を戦争で失いかわい

い娘を中野に預けたまま行かなければならぬ悲しい切ない別れの涙だったのだと
思うと、その時の母の心が伝わってきて涙が溢れてくるのである。

その後、いつの頃から母がひよつこりと中野に現れて、私に水玉模様や赤紫の縞模
様のかわいいワンピースを着せてくれたことを覚えていた。そのワンピースは松江
に住んでいる母の姉の娘で私より五つか六つ年上の従姉のお下がりだったようだ
が、そんなことは無頓着にそのワンピースを着てはしやぎながら部屋の中を走り回
っている私を母はうれしそうに見ていた。そしていつの間にかいなくなっていた。

夏休みになった頃だったと思う。私は母に連れられて母の実家、佐草に行つた時
のことを思い出す。後ろの庭で遊んでいた私は、玄関からいちばん離れた裏側にあ
る4畳半ぐらいの部屋で、畳半畳分をはずした床板の上に七輪を置いてご飯を炊い
ている母の姿を見た。その時私は母に声はかけなかったが、ここがお母さんの部屋
なんだと思つた。母は毎日そこでご飯を炊き、二人の子供を学校に送り出しそれか
ら自分も1里以上もある山道を歩いて松江の看護学校に通つていたので。

後に私は、母から看護学校に通っていた頃の話聞いたことがある。「試験があるのにぜんぜん勉強できんぞ。朝、歩き歩きノートを見て一所懸命覚えて学校へ行ったわ。そげしたらちようど覚えたところが試験に出てな。ほんによかったわ。英語の先生が『今度の試験は安部さんが最高点でした。』とみんなの前で言われてな。私もびつくりしたわ。」とうれしそうに話して聞かせた。

昭和26年3月、母は松江助産婦看護婦学校を無事卒業した。母は仁多郡鳥上村（現在は仁多郡奥出雲町鳥上）の診療所に就職が決まったらしいが、そこで働くためには保健婦の資格がなくてはならなかつたのでさらに6カ月保健婦になるための勉強を続けた。保健婦資格取得の試験の時、母は受からなかつたらどうしようと心配だつたらしいが無事合格して鳥上の診療所に勤めることになつたのだつた。

私は、母が松江助産婦看護婦学校を卒業した年の昭和26年4月に三成小学校に入學し石原の伯父の家から学校に通い始めていた。小学1年の秋頃だつたと思う。授業が終わつて帰りの仕度をしている私の側に担任の先生が来て「お母さんが、玄関

のところまで待つておられるから急いで行きなさい。」と言った。私は「お母さんはどうして今、学校に来たんだろう。」と驚いて急いで玄関のほうに行き、上履きを下駄箱の中の靴と履きかえるのももどかしく玄関の外に出て見た。そこに母が立っていた。母はにつこりと笑つて私を迎えた。「なして来たかね?」「役場で保健婦の研修会があつて来たよ。今昼休みで出てきたけど、昼からまた行かにやいけんわ。」と話しを交わしながら校門を出て、母は学校の前にある小さなお菓子屋さんに私を連れて入った。

「和美ちゃんの食べたいお菓子なんがいいかね。何でも買つて上げるけん見てみなさい。」と母は言つた。その店はいわゆる駄菓子屋さんで今のように多くの種類のお菓子は置いてはない。チョコレートやケーキなどはもちろん置いてはなかつたが、急に食べたいお菓子を選ぶとなると戸惑つてしまう。母はまたすぐに役場に戻らなければならぬのだと思うとゆつくり探してはおられない。私は店の入り口の方から陳列してあるお菓子をさつと見ながら奥のほうに進んで行つた。一番奥の隅

のところ箱に入れて置いてあつた長さ5、6センチほどの短い羊羹を見つけた私は遠慮がちに「これ」と指差しながら母の方を見た。母は「それでいいかね。」と言いながら羊羹を二つ箱から取り出して店の人に支払いに行った。店を出ると母は「食べなさい。」と言つて羊羹を一つ私の手に握らせもう一つを「ここに入れちよくけん後で食べなさい。」と言つてランドセルのふたを開けて横のほうに入れた。それからまた校門の方に向かつて歩き、校庭に入った。石原の伯父の家から小学校に通う時は、校庭の横にある裏側の門の方から通つていたからだつた。母は校庭に入つて2、3歩一緒に歩いて立ち止まり「じゃあ、帰りなさい。」と言つた。私は黙つてうなずいて校庭の横の道の方に向かつて歩き始めた。5、6歩ぐらい歩いて私は母の方を振り返つた。その時母の目には涙が溢れていた。振り返つた私に母は「行きなさい、行きなさい」と手の平を前に押し出すようにして帰るよう促した。何度か振り返つて母を見た時、色白の顔に目から溢れてこぼれ落ちそうになつた涙が陽に映えてきらきらと輝いて見えた。「きれいなお母さんだな」と私はその時思つた

のだった。目にいっぱい涙をため、じつと立つて私を見送るその時の母の姿は私の心に深く刻みこまれて忘れることはない。その時以来、母は私に会いに三成に来ることはなかった。その後母のことを思い出すと、中野の裏山の裾野に凜として気高く、ひっそりと咲いていたあの一輪の白百合の花のイメージと重なって私の脳裏に浮かんでくるのだった。

我が母の

清らなる目に 涙満つ

見送る姿 映えて美わし

八十（やそぢ）の歳月過ぎて

母はなお乙女の如き清らなる心持てり

その美しき心持て 我が心照らせり

ああ、我が母は野に咲く白百合の如き人なりとぞ思う

(1997年11月)

上記の歌は私が韓国外国語大学日本語科で日本語教育に携わっている頃、学生で作った詩集に、「母」と題して載せた歌である。私の小学校1年生の頃の母の思い出と平成9年(1997年)当時、82歳の頃の母のことを歌ったものである。私が上記の小学校1年生の頃の母の思い出を担任のクラスの学生達に話したとき、ある学生が「先生の話は、まるで物語を聞いているみたいですね。」と言った。その時も母の思い出を話しながら、母との別れの時の様子をまるで映画の一シーンを見ているような心地で話していたのに気づいたのだった。

母は昭和26年11月から鳥上の診療所に勤め始めた。鳥上には父の妹の嫁ぎ先の叔母の家があつた。その叔母も夫を戦争で失い娘1人、息子2人で暮らしていた。母

はその家の奥の一部屋を借り、兄二人を鳥上の小学校に通わせながら診療所に出勤する新しい生活を始めた。診療所で看護婦として働きながら、お産の知らせがあればすぐにその家にかけて助産婦としての勤めを果たした。その当時は一般家庭に電話は普及していなかったので、夜中でも明け方でもお産がある家の人が鳥上の家を訪ねて来て母をその家まで連れて行ったという。

私が母の住む鳥上の家に初めて行ったのは、小学校1年生が終了した春休みだったと思う。叔母が私をお客様のようにな、こたつのある居間の座布団の上に座らせ、母がこたつの台の上にご馳走を運んできてもてなしてくれた。その時は自分が急に偉くなつたような気持ちになつたことを覚えている。

その家の裏側のいちばん奥の6畳くらいの部屋で母と兄二人は暮らしていた。佐草にいた頃と同じように畳1畳をはずした板の間に七輪を置いて食事の仕度をする母の姿があつた。

それから数日経つた頃だつたと思う。母が診療所の当直の日、私に来るようと

言つて診療所のある場所を覚えてくれた。鳥上の診療所は叔母の家からいちばん近いバスの停留所、山郡橋から横田駅行きのバスで15分位行ったところにあつた。「診療所前」の停留所で降りて田んぼの間の細い道を少し入ったところだつた。診療所では母より少し若い看護婦さんが優しく私を迎えてくれた。母はその看護婦さんを「清水さん」と呼んでいた。その日の当直は母と清水さんの二人らしい。4畳半ぐらゐの当直室のこたつに当たつて待つていると母と清水さんが楽しそうに話しながら入つて来た。清水さんは明るくてユーモアたっぷりの人で母をよく笑わせていた。夕ご飯は何を食べたかは覚えていないが三人でこたつを囲み、和やかな雰囲気の中で楽しく過ごしたのは、私には久しぶりのことだつたし、こんなに楽しそうな母の姿を見たのも初めてのことだつた。夕食後は清水さんが私にトランプ遊びを覚えてくれて三人でトランプをしたことを覚えている。その夜は満たされた気分でこたつに入つたまま先に眠つてしまった。

母は後に鳥上で思い出を東京に帰って来た私に話したことがある。母は鳥上で働いていた頃が一番楽しかったという。「みんなに安部さん、安部さんとかわいがられ、親切にしてもらってありがたかったわ。」と懐かしそうに話した。

ある夜、お産の知らせがあつて行ったら逆子で足の方から先に出そうになつてい。早く頭を出さないと赤ちゃんの命が危ない。祈るような気持ちでお腹を押しえたりいろいろして、最後に頭が出てきた時は、赤ちゃんはぐったりしていて産声を上げなかったという。母はとつきに赤ちゃんの両足を片手でつかんで逆さにし背中をパンパンと叩いた。するとその瞬間に赤ちゃんが「おぎゃあ」と産声を上げたという。母はその赤ちゃんの百日のお祝いに招かれ、「この子の命の恩人」と言われていちばん上座に座らせられ丁寧なもてなしを受けたそうだ。

母が鳥上で働いていた頃の話をした時「仕事が楽しかった」という母の言葉を聞いて私は本当によかったと心から思い安堵したのだった。私が幼い頃見た母の姿の

多くは、働く母の背中であり母の別れの涙であった。幼心にも「お母さん大変なんだな」と感じていたし、大人になってからも母に心配ばかりかけた私だったので喜ぶ母の姿が見たかった。「お母さんにも楽しい時や、うれしい時があつたんだ」と思い、ほつとした気持ちになつたのである。

私が小学校4年生の時、三成の伯母が病気で亡くなり、伯父と私の二人になつた。その後鳥上の従姉が時々手伝いに来ていた。私が中学1年生になつた頃母は鳥上で助産婦の仕事を辞め、三成の伯父の家に来ていたが、家にいることはあまりなくゆつくり話をしたこともなかつた。その頃母は三成町の民生委員をしていて毎日忙しいようだった。三成に来てからの母には鳥上で働いていた頃のような生き生きとした姿は見られなかつた。今、その頃のことを思うと母はきつと鳥上での仕事を辞めたくはなかつたと思う。周囲の事情で仕方なく仕事を辞め、以前より遠慮がちだった三成の伯父のもとで生活することは忍耐のいることだつたらうと察することが

できる。

私が中学を卒業する頃には、三成の家で母をあまり見かけなくなつた。どこにいたか聞いたことはなかつたが、夫婦共働きの親戚のうちで子供の世話をしたり食事を作ったりしていたように思う。三成の伯父から経済的な援助を受けることのできない母は、高校に進学した兄二人の学費などを作るために働かなければならなかつた。私が木次の川本の叔母の家から三刀屋高校に通っている頃は、母は川本医院の看護婦として働いていた。母は夜遅く、眠っている私の布団の横にそつと入つてきて寝ては、朝早く私がまだ寝ているうちに自宅のすぐ前にある医院の方に出て行つていた。その当時、川本医院には看護婦さんが4、5人泊り込みで働いていた。毎日3食、家族を含めて10人分の食事の仕度をするのは大変なことだったが、叔母が一人のお手伝いさんと台所の仕事を任されていた。

叔父は休みの日や診察の合い間に自宅の方にやって来た時など、時々叔母に小言を言っていることがあつたが、そこに母が居合わせた時はいつも叔母をかばつてい

るのを見た。

母は私が高校を卒業する頃まで川本医院で働いていたが、その後、知り合いからの依頼で松江の夫婦共働きの学校の教師の家で住み込みのお手伝いさんをしていた。日曜日のある日、母は「働いている」家の先生夫婦が和美さんに会ってみてほしいそうだ。」と言って私をその家に連れて行つた。

その家は松江市内からバスで10分くらい行つた静かなところにある二階建ての家だった。家に着くと先生夫婦は、私をまるで家族のように喜んで迎えてくれた。私を一階の部屋のこたつにあたらせ、自分達を紹介した。ご主人は中学校の教頭で奥さんは小学校の教師だった。小学校5年生の男の子と幼稚園に通う女の子の4人家族だった。幼稚園に通う女の子は母を「おばちゃん、おばちゃん」と慕っていた。奥さんは私に「私たちは、お母さんを家族の一員と思つてます。娘も幼稚園の遠足や運動会には、おばちゃんと一緒にいいと言つてますよ。お母さんに来てもらつて本当に助かってます。」とニコニコしながら話され、私もうれしくなつた。母の寝

室は2階にある二部屋のうちの二部屋だった。

6畳くらいの部屋だったが、あまり荷物がなかったので広々と感じられた。日曜日はお休みをもらっているらしく母は自由にしているようだった。母はどんな仕事でも真心込めて精一杯やるのでみんなに好かれるのだと思った。

二人の兄は、東京の大学を卒業し東京で就職した。母は鳥取大学医学部に入学した私に、毎月不足なく送金してくれた。上の兄は結婚し夫婦共働きで学校の教師をしていた。母は孫娘が生まれると、その面倒を見るため東京に出てくることになった。三成の伯父は私が高校3年生の秋に亡くなり、母は時々三成に帰って家を管理していたが、伯父の家は石原の自家の人が管理することになったので、母は完全に島根の地から離れ東京に移り住むことになった。

上京後母はしばらく孫娘の世話をして兄夫婦の家に行ったが、二人目の娘が生まれると姉は仕事を辞め子供の世話をするようになったので、母は東京で仕事を探しあ

そか病院に助産看護婦として就職したのだった。

後に母は就職する時のことを私に話してくれたことがある。新聞の求人欄で仕事を探した。病院で働きたかったが、長い間看護婦の仕事をしていないし田舎者の自分には無理だと思っていた。だからたまたま新聞にあそか病院の清掃員の求人が載っていたので病院で働けるならそれでもいいと思い、応募したという。面接の日、履歴書を提出すると担当の人が母の「資格・免許」の欄を見て、「安部さんは、なんて謙遜な人でしょう。看護婦、助産婦、保健婦という三つの資格を持ちながら清掃員の応募をなさるとは。ちょうど今、産院のほうで助産看護婦さんが必要だからそちらで働いてもらいましょう。」ということになったそうだ。昭和43年4月、母53歳の時であった。

私は三成の伯父が戦時中に住んでいた韓国という国に深い関心を持っていたが、大学に入学して以来、医療奉仕を目的として韓国に留学したいと考えるようになって

た。私が日本で大学を卒業して医者になることに希望と期待をもって仕送りを続けている母の気持ちを思いやることもせず、私は韓国への留学を決意したのだった。私が韓国に留学すると言った時、母は最初は驚き戸惑い私の将来のことを心配したが、私の意志が固いことを知り認めざるを得なかった。また私のことをよく理解している医師や医学部の先輩や友人が、母が安心できるようによく話してくれたので留学する時は母も納得し安心して快く送ってくれたのだった。そして今までと同じように学費の仕送りを続けてくれたのだった。韓国のソウルにある延世大学医学部に留学した私は、厳しい現実に直面して初めて理想ばかりを追い求めて来た自分の無力さを痛いほど思い知らされた。延世大学医学部では、授業は韓国語だが教科書は英語の原書であった。1週間の講義の後、次の1週間は実習がありその後は試験という毎日であった。韓国語もまだ充分でない私には授業について行くのは至難の業であった。しかしいったん決意して韓国に来たからには、たとえ医者には成れなくても何か私にできることがあると信じていたので、断念して帰国しようと思つた

ことはなかった。

医学部に入学してはじめ頃は大学の前で下宿をしていたが、勉強に疲れた時私はよく車の行き交うにぎやかなソウルの街を歩き回った。ある日、韓国語もよく分ならず先の全く見えない暗闇を歩いているような憂鬱な気持ちで街を歩いていると、前方から近づいてくる大型バスの前の表示板に漢字で「韓國外國語大學」と書かれた文字が、ぼんやりと前を見ていた私の目に飛び込んできた。その頃（1970年代初期）大学の出席簿も人名は漢字だったし、街の看板も漢字で書かれたものをよく見かけたので漢字自体は珍しくはなかったが白地に黒く書いた「韓國外國語大學」という文字が明るく浮き上がって見えた。見ようともしていないのにどうしてこんなにはつきりと見えたのだろうかとその瞬間不思議に思ったが、その時は医者になることしか考えていなかった私には関係のないことだったのでその後すぐ忘れてしまった。その黒い文字で書かれた場所が後に韓国で私に与えられた職場となることなど夢にも考えないことであつた。

私は韓国に留学して以来、母が心配しないようにできるだけひと月に一回は手紙を書くようにしていた。元気で頑張っている様子などを伝え、苦しいことや辛いことはあまり書かなかつた。母も必ず返事をくれたが、いつも健康を気遣う言葉が記されていた。何度も下宿を変わり、たびたび住所が変わったので、母からの手紙が届かなかつたり失くしてしまつたものもあるが、たいてい届いた手紙は読んだ後箱に入れてしまつておくことが多かつた。そして引越しのたびにその手紙の入つた箱も一緒に引越したのだつた。

私が帰国する時に韓国から持ち帰つた荷物は、母が亡くなるまですぐ必要な衣類以外は取り出してみたことはなかつたが、職場を退職後、荷物の整理をした時、箱に入つた母の手紙を見つけた。懐かしさと切なさの入り混じつた思いで一通一通読んでみた。母の手紙は昭和50年（1975年）12月2日付けのものから平成4年（1992年）8月4日付けのものまで全部で131通もあつた。それらの手紙を

読むとその当時の母や私の生活の様子を知ることができる。平成4年8月以降は、私が帰国する平成12年12月まで月に2、3回私の方から母に国際電話をするようになったので母の手紙はない。

韓国に留学して以来3、4年の間私が安定した職に就くまで母に心配の掛け通しだったので留学して初め頃に来た母の手紙は読み返すのが辛く胸が痛かった。

私が日本まで持ち帰った母の手紙で一番古い日付の昭和50年12月2日付けの手紙を受け取った頃は延世大学医学部3年生で試験に追われ必死で勉強している時であった。母59歳の時の手紙には次のように記されている。

月日の経つのは早いものもう師走の声を聞くようになりましたね。年を取ると尚更早く感じられますわ。

日本は今公労協のストで大変です。もう一週間目です。困ったことすわ。和美ちゃん 絶え久しく御無沙汰致してすみませんでした。元氣で一生懸命

勉強していると安心して忙しさにまぎれつい失礼しました。生れつき筆不精者年取ると字を書くことも億劫になりつい延び延びになりました。昨晚(十二月一日)十一時頃帰宅しましたらなつかしい和美の便り拝見しました。

元気で頑張っている様ですけど体を大切に限度を考えて勉強して下さいよ。私のために、むづかしい勉強を無理にして体をこわしてしまっても何にもありませんよ。私は毎日和美の事を忘れた事はありません。もう後三年、もう後二年と指折り考えて希望を頂いて毎日を楽しく過ごして居ります。

一月二十日までの試験が終れば又一度帰って来られますか？試験の結果は如何あろうとも、和美のがんばりやで努力家には母としても頭の下る思いです。

和美ちゃん、今度の試験に最大の努力をして、それで駄目ならもう仕方ありません。

まあ、一生懸命頑張っ見て下さいね。

(中略)

近い中にお金十萬円送ります。局より。忙しいからもうお便りは要りません。私も変った事が無ければ出しませんから。お互いに元氣でがんばりましょうね。人参茶とか栄養になるものを買って食べて下さいね。お金を送るのは私の楽しみですのに、・・・

もし帰る時は第一人参茶を願います。(今はありません)第二たらこ第三キムチ他の土産は要りません。

十二月二日 PM 3:00 PM 4:00より出勤します。

なつかしき

和美ちゃんへ

母は私の健康を気遣いながらも私に期待と希望を託して元氣に働いている様子を
知ることができる。

昭和52年（1977年）2月25日付けの手紙には母が私に会いに韓国に行くための飛行機の切符を予約した時のことが記されている。当時母61歳であった。

東京は今日（二十五日）は晴れたよいお天気です。C14度位 今日には五時から勤ムですので交通公社へ切符の予約を問合せましたら三月十二日羽田発九時五分韓国（金浦）着十一時二十五分 十六日952便午後一時発で午後二時五分羽田着だそうです。やっと切符を買ふことが出来ました。これから2回池袋の交通公社へ写真等持って行かなければなりません。十二日十一時二十五分に着いても色々と検査等あって、おそいでしょから、学校が終わってから来て下さい。私は何時まででも和美の来るまでは待つて居りますから、勉強は怠らないで下さいよ。

（中略）

まあ三月十二日には韓国へやっとの思いで行けます。ではお逢いする日を

楽しみに。

和美ちゃんへ

胸へ安部とネームを入れて行くが

よいでしょうか？

母は私が苦闘の末やつと医学部4年生に進級した年の昭和52年3月12日に私に会いにソウルにやつて来た。ちょうど大学の前期の授業が始まった頃だった。その日は土曜日で授業は午前中で終わったが空港まで行つて母を出迎える時間には間に合わなかったので、韓国に留学してその時休学中の母もよく知っている私の友人に母の出迎えを頼んだ。

待ち合わせた医科大学の玄関に母は友人に連れられて、うれしそうに生き生きとした表情でやつてきた。私も母に会えてうれしかったが、これから先まだまだ厳しい道が続くことを思うと、自信を失いつつあった私だったので母の姿がまぶしく感じられたのだった。授業を受けている教室や大講堂などを案内した後、外に出た。

友人がキャンパスと校門の前で二人の写真を撮ってくれた。その夜は私の借りている一部屋のアパートで母と共に過ごした。あくる日の日曜日は、母と二人でお世話になっている方々のお宅を訪ねて挨拶したり、ソウル市内を歩いて観たりして終わったが、母は私に会えたことがうれしくいつも楽しそうだった。次の日から母が帰国する16日まで私は授業があるので母のソウル観光などをすべてをまた友人に託した。夜は私のアパートに帰って来てその日観たところなど話してくれた。「今日な、ソウルの町歩いていたらな、後姿が和美にそっくりな人が歩いていて、もう少しで声をかけるとこだったわ。」とうきうきとした声で話した母のことが今も深く記憶に残っている。

母の4泊5日の旅は、私とまる一日をいっしょに過ごしたのはたった1日しかなかったが、母はソウルに来て私に会ったことで満足して東京に帰って行った。

その後も私は精一杯努力を続けたが、体調を崩して進級できず体力と能力の限界

を感じて医者への道を断念したのだった。医療福祉の分野で仕事をしたかった私はその後奨学金を受給しながら医療専門大学を卒業。理学療法士の国家試験を受け資格を取得した。

卒業後私は韓国の医療福祉施設で仕事をしたかったが外国人の採用は難しいとのことだった。卒業した年、私は日本人の知り合いの方から紹介してもらったある社会福祉施設の職業訓練院に就職し、働きながら日本人の私にできる仕事を模索した。私が医者になることを期待していた母は、心中失望も大きかったことだろうが、私には愚痴一つ言わず何よりも私の健康を気遣ってくれていた。

昭和56年（1981年）1月7日付けの母の手紙には「私の幸せは三人の子供が元気で幸せに暮してくれればそれで満足です。（中略）和美も卒業もしたから自分の一生の仕事を選んで働いて下さい。」「そちらで自分の一生の仕事をして成功してくれば私も満足です。それから私は何にもいりません。只お金があれば貯金をしておきなさい。老後のために。私はもう死ぬまでお金はあります。心配しないで下

さいね。」と記され最後に

柔にして剛（表面はやさしく心は強く持つこと。）

この教訓を忘れずに。

明日あると思ふ心の徒桜

夜半に嵐の吹かぬものかわ

この古歌を忘れずに 一月七日 P・M 四・三〇

和美様

とやつと一人立ちした私への教訓が記されている。そして私は今、この手紙を書き写しながらはつと気が付いたのだが、手紙の最後に書く私の名前が和美ちゃんから

和美様が変わったことである。1月7日以降に來た母の手紙は皆、和美様となっていることがわかった。それは親の傘下を離れ一人の社会人となった娘に心のけじめとして示した母の愛情の現われだったのだと今思うのである。ずいぶん長い間母に心配と苦勞をかけたものだと思い返す時、私の至らなさに心が痛む。

その年の4月、私は駐韓日本大使館併設のソウル日本人学校の養護教諭として採用されることになった。韓国に留学して韓国語を勉強している頃、日本から來た私達留学生は「日本人留学生の会」を作り、日本大使館の一室を借りて定期的に集会を開いていた。ある時日本人学校担当の参事官が入って来て「皆さんの中で、教師の資格を持っている方いませんか。」と聞かれたことがあった。私は日本の中学校英語教員の資格を持っていたので、その時手を挙げたことがきっかけとなって、何度か代用教員としてソウル日本人学校に行ったことがあった。今度は、医学の知識もあり韓国語もできるといふことで常勤の採用だった。私の願いは韓国の社会で働くことだったので、私の生涯の仕事とは思わなかったが今の自分に与えられた仕事

と信じ働いた。日本人学校に就職してから、夏休みには母のもとに帰ることが多くなり、母と共に過ごす機会が増えたことが何よりありがたいことだった。

母はまだあそか病院で働いていたので、夜勤で夜もない日もあり、一日ゆつくりできるのは、休暇の日ぐらいしかなかったが、母の側にいるだけでほっとした気分になれた。母も私が帰ったことがうれしかったらしく台所で食事の仕度をしながらよく歌を口ずさんだり鼻歌を歌ったりしていた。その歌は時に軍歌だったり、子守唄だったり、「宵待草」や「真白き富士の嶺」「カチューシャの唄」などで私の知っている歌が多かった。母はうれいしことがあると自然に鼻歌が出るらしく「きのう病院で、みんなに『何かうれしいことがありますか。安部さんはうれしいことがあると鼻歌を歌うからすぐわかる』と言われたわ。」と言っていた。母が休暇の日初めて浅草の浅草寺や泉岳寺の四十七士の墓地に連れて行ってくれた時のことが楽しい思い出として懐かしく思い出される。

母は昭和58年（1983年）3月31日、あそか病院を退職した。昭和58年4月10

日付けの手紙にはその時のことが記されている。

和美さん

随分長い間失礼しましたね。三月三日に出したお便り三月八日夕受取りました。

私も三月三十一日付で退職いたしました。十五年が夢の間に過ぎ去りました。その間何の大過もなく、そして元気で終えさせていただきました事、神佛の加護と心から感謝いたしております。退職後九日も過ぎましたけど、色々と手続きやら、外の仕事がありまして忙しいです。それに歯が痛み出して顔がはれ齒の継続診療の手続きをしたりで、まだ落着いて家の中の片付も出来ないです。

(以下略)

追伸

便りを出そうと思つて書いたら封筒がないので、買いに出て、ポストを見れば和美よりの便り、又この便り書きました。四月三日出しの便り四月九日受取りました。元氣で働いて居るようで安心しました。(中略)今日は日本は、都知事、区長等の選挙です。これを書いたら行こうと思つて居ります。それから十五年の病院勤ム生活を無事に終えたので、その報告に墓参りをしようと考えています。(中略)夏休み帰れたら人參茶を持って(沢山)帰つて来てください。

では御大事に。体に注意して。

四月十日 十時

和美様へ

母があそか病院を退職したのは67歳の時であつた。今思うと母は夜勤や当直や当

直明けの仕事もある看護師の仕事を十分こなし、よくもこの年まで元気で働いたものだと感心せざるを得ない。母の手紙にあつたように「神仏の加護」のお蔭と私も思うのである。

私は、母が退職した年（昭和56年）の9月に教育大学院に入学した。今後韓国で私にできる仕事は大学で日本語を教えることだと考えたが、大学で教えるためには最低修士課程を卒業していなければならなかった。私は、昼間はソウル日本人学校で働きながら、夜間の大学院に通った。幸い教師の資格のある者には授業料減免があり、成績優秀者には奨学金の制度もあつてほとんど学費を使わずに勉強することができた。

母は仕事を辞めて生活のリズムが変わったことからしばらくは体調の不良を訴えていたが、だんだん回復してきたようだった。子供の頃から百人一首が好きだった母は、和歌の勉強を始めた。昭和57年（1984年）2月27日付けの手紙には百人一首の会に入会したことが記されている。

私も昔から百人一首が好きでしたので、二月から月二回第二、第四金曜日六月まで行き万葉集、新古今集等歌の勉強をすることにし新宿の方まで行きます。二月十日と二月二十四日二回行きました。一月は終わって居りましたけど、私は二月より入会させて頂きました。年寄り、中年、若い人三十人位です。今の私にはこの勉強に行くのが何よりの楽しみです。

母が何よりの楽しみにしていた百人一首の会も「人数が出来なくて中止になり」「時々デパートに行き見て見ると、大宮の泉さんに逢ふのが唯一の楽しみ」になつたと十月五日付けの便りには書かれている。母には女学校時代の友達が横浜と大宮にいた。大宮の友達とはよく気が合うようでよく二人で行き来していたようだ。また時々一人でデパートに行つて、自分のものは何も買わなくても私に似合いそうな服があると買つておいて休みに私が帰つた時に着せて見るのが母の楽しみでもあつ

た。母の衣服は地味な色で数も多くはなかったが、私とは違つてとてもお洒落だった。時々私と一緒に外出する時、母は鏡の前で着て出ようとする服を胸に押し当てて「これ（この服）とこれとどっちを着たらいいかね。」とよく私に問いかけた。「どっちもいいよ。」とあまり関心を示さない私に母は「お前は洒落つ気が全然ない。」と不満だった。

母は金色の厚い和紙の表紙に金色の紐で綴じた毛筆の「小倉百人一首」の本を宝物のように大切にしていた。百人一首の会に通つていた頃入手したものである。それを本棚から取り出して私に見せ「この本はいいよ。私大好きだわ。」と言つて胸に抱いた。ふだんは本棚にしまつておいて寂しい時、それを取り出して開いてみては楽しかった昔のことを懐かしみ一人慰んでいたのだらうと思うと今また母がいとおしく思われてくるのである。

百人一首の話になると、いつも母は目を輝かせて歌を詠じその意味を私に説明した。母は子供の頃、お正月に「小倉百人一首歌かるた競技」に興じて夜を明かし

たほどなので歌は百首とも全部覚えていた。私は高校時代に古文の時間に習った和歌をわずか7、8首しか覚えていないのに母の記憶力には感心した。試しに私が覚えていた歌、例えば柿本人麻呂の歌「あしびきの」と詠み始めると母はすぐに「やまどりのをの　しだりをの　ながながしよを　ひとりかもねむ」と先に詠ってしまふのだった。

休暇が終わりに近づきソウルに戻る2、3日前頃になると、旅行ケースの中に入れて行く物をまとめて入れ始める。そんなある日、母は卒業証書などを入れておく細長く丸い紙筒から丸くくるまつた卒業証書大の紙を取り出し「これを持って行って机の前にでも張っておくといいよ。」と言って私に手渡した。広げて見るとそれは毛筆のきれいな楷書体で書かれた『福澤諭吉訓』であった。

それは母が女学校時代から大切にしていたものようだった。

福澤諭吉訓

- 一 世の中で一番楽しく立派な事は一生を貫く仕事を持つことである
- 一 世の中で一番みじめな事は教養のないことである
- 一 世の中で一番淋しい事は仕事のないことである
- 一 世の中で一番みにくい事は他人の生活をうらやむ事である
- 一 世の中で一番尊い事は人のために奉仕して決して恩に着せないことである
- 一 世の中で一番美しい事はすべてのものに愛情を持つことである
- 一 世の中で一番悲しい事はうそをつく事である

文 悠

この世を生きていく私達にとって大切な心構えが易しいことばで分かりやすく七つの項目にまとめられていて、真に生きた教訓だと感じた。これを私の卒業証書の入った紙筒にいっしょに入れてソウルに持ち帰り、それをコピーして机の前の壁に

張つて座右の銘とした。

私が教育大学院に通つて2年目の昭和60年（1985年）4月に修士論文を書く資格を得るための総合試験があり、無事合格した。その年の4月17日は母の満70歳の誕生日だった。私の合格の知らせが母の誕生日のプレゼントになった。母の5月1日付けの手紙には次のように記されている。

お便り四月十七日受取りました。丁度私の誕生日に嬉しい合格の知らせ本
当に嬉しうございました。四月十五日には愈一家が銀座の有名なホテルにて
私の誕生日を祝ってくれました。十七日は顕穂が祝ってくれました。ありが
たいことです。

今日はもう五月一日、この三、四日大変よいお天気続きです。昨日顕穂休暇
だったので清澄庭園まで徒歩で行きました。すばらしい庭園でしたわ。

それから四月二十六日ソウル日本人学校長（大木衛）より絵葉書を頂きました。恐縮しました。

内容、韓国語がすばらしいお嬢様ですね。大事なことは安部先生に通訳を頼んでいます。養護の部門を担当していただいておりますが、どうぞ御安心して下さい。私も今年初めて着任しましたが、皆さんと仲よく、そして実績をあげたいと存じます。今後ともよろしくお願いいたします。ごあいさつまで。4/19”

こんな文面でした。私からはお便りしませんから、よろしく申して下さいね。私も年のせいか血压はやはり高いです。その上胃下垂だからたくさん食べられないし、あちこち少しづつなんぎで困ります。（以下略）

その後私は、夜寝る間も惜しんで卒業論文を書き、昭和61年（1986年）2月大学院を無事卒業した。3月より韓国外国語大学日本語科の非常勤講師として夜間部の学生を担当することになり、昼間は日本人学校に勤め、夜は大学で日本語を教えた。翌年3月韓国外国語大学の専任講師として採用が決まり、2月にソウル日本人学校を退職した。韓国で私にできる仕事をやつと与えられた私はそれから日本に永久帰国するまで15年間、韓国外国語大学で日本語教育に携わることとなったのである。

大学は2期制で夏季、冬季の休暇が長い。1年に2度も帰国して母と過ごす機会が増えて幸いであった。母の昔の思い出話を聞いたのもほとんどこの期間だった。

大学に勤めて3年くらい経ち、夏休みに帰国した時のことだったと思う。ある日、母と一緒に買い物に出かけて帰る途中、飯田橋の駅で私の教えている1年のクラス男子学生3人とぼったり出会った。夏休みの間、日本語の勉強のために飯田橋にある日本語学校に通っているという。その学生の1人が私の後ろに立っている母を

見て韓国語で「先生のお姉さんですか？」と私にたずねたのだ。内心私は驚いたが静かに「私の母ですよ。」と答えると「ええー、本当ですか？お母さんですか！」ととても驚いた様子だった。3人の学生とは後日また会うことを約束し、その後すぐ別れた。その時母はもう75歳を何ヶ月か過ぎていたのに、私の姉と思えるほど若く見られたのだと思うとうれしかった。学生とは韓国語で話していたので、母には何を話していたかは分かっている。母と並んで歩きながら「お母さんのこと、私の姉さんかって聞いてたよ。」と母に言う。「ふうん」とだけ答えたが、きっと母もうれしかつただろうと思う。

平成3年（1991年）4月17日、母は喜寿の誕生日を迎えた。母の5月7日付けの手紙には

(前文略)私もあちこち故障はあるけど、まあまあ元気で消光しています。(中略)

荒川さんは足の膝裏が痛んで歩けないそうです。四月二十五日には泉さん宅へ行き一泊して帰りました。(泉さんの旦那さま三月二十九日死去)以前知らせましたかね？

愈に喜寿の祝に商品券をいただきました。何かおいしいものでも買って食べなさいと、連休は込むから他日奥多摩の方へでも連れて行くと申ししていました。あきおと公園歩きをしましたら、つつじや、ぶし、ばたん等々美しく、きれいでした。花の盛りはよいですけど、やがては散って行くでしょう。私ももう後何年生きられるやら？残り少ない人生が惜しくてなりません。

(以下略)

母の手紙にはいつも生活の様子が詳しく書かれていて、母の周囲の人のことなどもよく知ることができた。荒川さんは横浜に住む女学校時代の友人、泉さんは埼玉

県の大宮に住む友人である。母は荒川さんと近くを旅したり、泉さん宅でおしゃべりをするのが楽しみとなっていた。

私がソウルから持ち帰った131通の母の手紙の最後の1通は、平成4年（1992年）8月4日付けのものである。満77歳の母は夏の厳しい暑さですっかり弱り果ててしまったようで、「苦しくて便りなんか書けませんでした。」「七月中頃より少し食事が食べられるようになった」など体調の不良を訴える文面であった。母が私の手紙の返事を書くこと自体、大変な負担になっていたことに気が付き、その後1ヶ月に2、3回くらい直通の国際電話で母と話すようになった。大学に勤めるようになってから長期休暇で母と過ごす時間も増え、私にとって一番幸せな時であった。12月に入り、ソウルの街にクリスマスキャロルの音楽が流れる頃になると私の心は希望で弾んだ。「もうすぐ日本の母のもとに帰れる。年末におせち料理を作る母のお手伝いをして、お正月には神社に初詣に行つて、・・・」そんなことを

考えるとうれしくてたまらなかつた。

帰国の途につき飛行機が成田空港に着陸すると、いつも「ああ、日本に帰ってきた」と母のふところに抱かれたような何か温もりのあるほつとした気分になった。その時私は「母国」という言葉を実感したのだった。韓国に留学して10年以上が経ち、韓国での生活にも慣れ、大学の授業も学生達と楽しい時間を過ごす中で、私は日本人であることに誇りを持った。いつも心の中で「私の母国は日本であり、私のふるさとは母の居るところだ」と思っていた。

秋になり松茸が出回る頃になると私は韓国の現地直送の松茸を母と兄のもとに送った。「松茸ごはんを炊いたり、吸い物にしたり焼いたりしていっぱい食べたわ。」とうれしそうに電話で話す母の声を聞いて私は満足だった。

母は平成6年（1994年）4月に迎えた傘寿のお祝いも元気で兄達に祝つてもらったようだったが、80歳を過ぎると私が休みで帰国する度に母の体力の衰え

が目に見えてわかるようになった。その頃から買い物や食事の準備などの家事は私に任せることが多くなったが、感心なことに家計簿を毎日付けることだけは怠らなかつた。86歳の頃まで家計簿をつけていた母だったが、だんだんその日のうちに記入できなくなりレシート用紙がたまってくるようになった。私が「大変だけん家計簿なんかもうつけんでもいいでしょう。」と母に言うと「そげだな。もうやめえわ。」ということになった。

母が83歳の頃だったと思う。休暇で帰国している私に「帰つて来てくれんかねえ。お前が側にいてくれたら百歳まででも生きられるような気がするわ。」と懇願するかのように言った。気丈だった母が年を重ね体力の衰えとともに今まで耐えてきた寂しさや不安そして遠く外国の地で暮らす娘への心配など様々な思いに耐え切れず娘の帰国を願ったのだと思う。その頃私はちょうど大学院の博士学位取得のための論文の作成中であり、私の生涯の仕事として65歳の定年まで働くつもりでいたので、すぐに母の願いに答えることはできなかった。しかし何度か「帰つてきて欲しい」

と願う母の声を聞き、衰え行く母の姿を見て私の心は揺らいでいた。母が側に居て欲しいと願ううちに帰らなかつたら私はこれから後ずつと親不孝な娘として後悔するだろうし、日本に帰りたくても帰るところもなくなると思った。そしてついに帰国を決意したのは母が85歳になった年だった。

平成12年(2000年)12月、定年まで居るようにと引き止める先生や学生に後ろ髪を引かれるような複雑な思いのまま帰国の途についたのであった。入るだけの荷物をぎっしり詰め込んだ大きなスーツケースを引つ張つて母のもとにたどり着いた時、母が「ああ、うれし、うれし」と子供のように喜ぶ姿を見て、私は「これでよかったのだ」と自分に言い聞かせた。

帰国後しばらくは家事をしながら母と共に過ごしたが、休暇で帰ってきた時のようにのんびりとした気分にはなれず、母との会話も以前よりは少なくなっていた。長い間韓国で暮らしてきて日本では生活できるだけの年金も受取れない私は、母の居なくなつた後のことを考えると何か仕事を見つけて働かなければならないと思つ

た。兄達とも相談して昼間はホームヘルパーに母の身のお世話をお願いすることにして仕事を探した。最初は友達が紹介してくれた日本語学校の教師として非常勤で働いたり、新しく立ち上げた日本語学校の主任教員を務めたりしたが、授業の準備や宿題、試験の採点など仕事を家にまで持ち帰って夜遅くまでやることが多く、私には体力的に無理な仕事だった。昔から医学・医療の分野に関心の深い私は、病院か医療施設で働きたいと思い、医療事務とホームヘルパーの学院に通い資格を取った。幸いにも資格取得後すぐに赤坂にある病院に採用が決まり、その病院のクランクとして働き始めたのだった。初めの頃は今まで一度もやったことのない慣れない仕事に戸惑い、若い先輩の職員に叱られながら緊張して働く自分を情けなく思ったことも幾たびもあったが、家で私の帰りを待つ母のことを思い、こうして仕事を与えられ「働けるだけでもありがたいことだ」と思い直し自分を元氣付けては毎日混み合う電車で通勤した。

世渡りの不器用な我

じっとみる

通勤電車の窓のその顔

その頃母は心臓を悪くして病院に1ヶ月ほど入院したことがあったが、退院後はすっかり体が弱りほとんどベッドから離れなくなっていた。母の身の回りの世話は日曜日を除き、すべてヘルパーさんをお願いしていた。私が勤め始めて母と話す時間はほとんどなくなつたが、母の様子はヘルパーさんや訪問看護師さんの記入した連絡ノートや訪問介護記録を見て知ることができた。私は帰宅後毎日それを見て一喜一憂した。「今日はとても御機嫌が良さそうで『昨日はうなぎを食べた、とてもおいしかった』『いちご（ジャム）は、青ハタのがおいしいね』などとおっしゃっていました」「島根のお話をしてくださいました。」などと記されていると元気そうだなと思ひほつとした気持ちになり、「今日は『難儀だけん食事いらんわ。』とおつ

しゃいました。」今日は、少しぐったりしている様子がうかがえました。食事の時とトイレ移動の時以外すぐに横になりたいご様子でした。」などと記されていると心配で落ち着かず、安心した気持ちで眠れなかった。母がたとえ寝たきりであったとしても生きていくだけのことだけで私にはありがたく大きな心の支えだった。

母は以前より口数はずいぶん少なくなつたが、私が帰ると気分のいい時はベットから起き上がり、ヘルパーさんの話をしたり台所で夕食の仕度をする私の様子をじつと見ていたりした。

病院に勤め始めて何ヶ月かが過ぎ、だんだん仕事に慣れてきて職場の皆からも認められるようになってくると心にゆとりが持てるようになった。仕事を探していた頃は、朝出勤する人達が駅の方に向かって忙しく歩いて行く様子を見てうらやましく思ったものだが、こうして今、私にできる仕事を与えられ私も働いているのだと思うと感謝の念と働く喜びが湧いてきた。そして以前、母が私に渡してくれた

『福澤諭吉訓』の

世の中で一番淋しい事は仕事のないことである

世の中で一番楽しく立派な事は一生を貫く仕事を持つことである

ということばを思い出し嘸みしめてみるのだった。

ある日曜日の昼下がりであったと思う。母はいつになく気分がよくて鳥根の話や勤めていた頃の話をまるで友達と話しているかのように楽しそうに私に話した。松江の天神様のお祭りに行った時の話や鳥上で働いていた頃の話などを聞いた。そして母は話の最後に「おかげさんで長生きさせてもらったわ。ほんに楽しい人生だったわ。」と言った。私ははつとした。私から見ると母の人生はけつして楽しい人生とは思えなかったからである。母の心の中では辛かったことや悲しかったことはすでに昇華されて楽しかった思い出だけが走馬灯のように浮かび上がってくるのだらうか。母のことばに私は「よかったね。」とだけしか答えられなかったが、苦勞ばかりしてきた母がしみじみと「楽しい人生だった」と言えるとはなんと立派な人だろ

うと感心せざるを得なかったのである。

母は90歳の誕生日も家で迎えることができたが、食べ物ほとんど食べられなくなった。6月に点滴するため入院し7月から食事は経管栄養摂取に変わった。私は毎日仕事が終わった後母の様子をうかがいに病院に寄った。兄達も勤めのない日は母の見舞いに来た。母が経管栄養摂取に変わった当分は、非常に苦しそうで見るのも辛かったが、心の中で母は必ず元気になると確信していたので「もう少し涼しくなったら元気になるからね。もうちょっとの辛抱ね。」と元気付けた。母は声には出さなかったが「わかったよ」と言っているようなまなざしで私を見ていた。

8月末頃になり、朝晩涼しい風が吹き始めると私が思っていたように母はだんだんと穏やかな顔になり元氣を取り戻してきた。だが、同じ病院での長期入院はできないため9月には別の病院に移ることとなった。新しく移った病院には療養型専門の病室があり行き届いた介護を受けて母はすぐに元氣を回復し話ができるようにな

った。10月中旬頃だったと思う。私が母のベッドの側に行くと「きょうはね。インフルエンザの予防注射してもらったよ。インフルエンザの予防注射は初めてだね。」と母ははつきりとした元気な声で話しかけてきた。入院して以来母が自分からこんな元気な声で話したのを聞いたことがなかったので驚いた。その部屋は4人部屋でちょうどその時、それぞれお母さんのお見舞いに来ていた顔見知りになった二人の女の人も驚いた様子で母の方を見た。私はうれしくなって「よかったね。お母さん、元気になって。優しい先生や看護師さんにも会えてよかったね。」とにこにこ顔で答えた。顔見知りになった二人も私の側に近づいてきて、「お母さん話せるんですね。初めて話す声を聞いたのでびっくりしましたよ。」と言った。それから二人は初めて母とあいさつを交わしたのだった。

私は、毎日母に会いに病院に通ったが、バッグの中にいつも小さな手帳大の「小倉百人一首歌かるたのしおり」を忍ばせておいて母が惚けてしまわないようにと願っている。母の気分のいい時にはそれを取り出し上の句を詠んで母の記憶力を試してみた

りした。「おかあさん、この歌覚えてる？」と言って「おくやまに」と詠いだすと、すぐに「もみぢふみわけ なくしかの こゑきくときぞ あきはかなしき」といった具合に答えることができた。ちやうどケアで回つて来た看護師さんに「母は百人一首をよく覚えていますよ。」と母に聞こえるように自慢すると看護師さんも「本当ですか。安部さん聞かせて。」と母にうながし、私が「はなのいろは うつりにけりなく」と詠い始めると「いたづらに わがみよにふる ながめせしまに」と得意げに続きを詠った。私はそんな純真な母がいとおしく思われてならなかった。

母がこの病院に移つて5ヶ月が経つたあくる年の2月中旬にまた別の病院に移らねばならなかった。3度目の病院は家からも遠くなり毎日は母に会いに行けなくなつたが極力行くように努めた。その頃から母は、声を出そうとすると咳き込むようになりだんだん話さなくなつてきた。百人一首の歌もわかつてはいるが声には出せなくなつた。私の覚えている歌の上の句を詠み「おかあさん、この歌わかるよね。」と聞くとうなずくので「声出さなくてもいいからね。私が詠むから。」と言って下

の句を詠んだりするようになった。そうして私は心の中で「お母さんももうそんなに永くは生きられないだろう。今のうちにお母さんに言いたいことを言っておかないといけない。」と思い始めていた。

ある日私は百人一首の歌を1、2首詠んだ後、次の歌を詠んだ。

我が母の

清らなる目に 涙満つ

見送る姿 映えて美わし

この短歌を詠んだ後、この歌は私が韓国外国語大学に勤務していた頃、学生が作った詩集に「母」と題して載せた歌であることを母に話し、小学校1年生の時母が保健婦の研修会で三成に来て、私に会いに学校に来た時の思い出をゆつくりと話した。「お母さんがね。学校の前のお菓子屋さんで羊羹買ってくれて食べたよ。校門のところでは別れる時、お母さんぽろぽろ涙流してた。その時私ね。おかあさん、きれいだなあと思ったよ。」母は表情一つ変えずに、ただじつと黙って聞いているだ

けだった。悲しかったことや辛かったことは話したことのない母だったからもう記憶に残ってはいなかったのだろう。それから私は「お母さん、ありがとうね。長生きしてくれてありがとうね。長い間たくさん働いてきたもんね。もう何も心配しないでゆつくりゆつくり休んでいいよ。」と言った。その時母はちよつと悲しそうな顔になつてわずかにうなずいたように見えた。その後私は、母に会いに行くたびに「お母さん、ありがとう。」「長生きしてくれてありがとう。」「という言葉を使った。母が元気な頃は、心では感謝の気持ちを持っていても気恥ずかしくて「ありがとう」と言えなかつたし、母が小言を言うといきついことばで言い返し、後で悪かつたなと思つても「ごめんなさい」と素直に言えなかつた私だったが、その時やつと素直に言えたのだつた。今思うと母がもう少し元気でことばが話せるうちに言つておけばよかつたのにと悔やまれてならない。

この病院は、リハビリテーションの職員がいないので、私は来るたびに母の手足をゆつくりと屈伸させたり、さすつたりすると自分なりに安心して「お母さん、ま

た来るからね」と言つて帰つて行くのが日課のようになっていた。

母はこの病院に入つて2ヶ月目の4月17日、91歳の誕生日を迎えた。夕方病院に行く、母の頭もとの置き台の上にきれいな花を生けた花籠と「安部美代様 お誕生日おめでとうございます。職員一同」とサインペンできれいに書かれたカードが置いてあつた。もうおいしい物を食べることも飲むこともできずただ寝たきりの母であつたが、生きていてくれてありがたいと思つた。その日も私は「お母さん、長生きしてくれてありがとう。」と母の手をさすりながら言つた。

5月始めのある日、ちょうど仕事が休みで家にいた私に、あそか病院の老人介護福祉施設である「あそか園」の相談員の方から電話がきた。母の入所を許可したので母と面接をすることになったという知らせだつた。兄の方にはすでに連絡が入つており、母の面接には上の兄が立ち会うことになつた。母が入院して経管栄養摂取のための手術を受けた時、もう再び自宅での介護は難しいと思ひ区役所に介護福祉施設入所の申請をした。その時区役所の係りの人は、入所の希望者が大変多いの

で、3年ぐらいは待たなければ入れないだろうと言われ、諦めて忘れかけていた。それなのに1年も経たないうちに入所が決まった。これで入院した後短期間であちらこちらと転院を繰り返すことなく、終身入居できる、しかも母が15年間も働いたあの「あそか病院」の施設へ入所できるので。そう思うと急に何か厳かな気持ちになり思わず心の中で何度も「ありがとうございます。」と天に感謝したのだった。

平成18年（2006年）5月22日、母はあそか園に入所した。しかし長い道のりを車に揺られてやっと入所しその後も検査のためあちこちと動かされて、その生活の変化と環境の変化が母には耐え難い負担になってしまったようだ。母は体調をくずし全く弱り果ててしまった。微熱を出し苦しい息遣いで喘ぐ母を見ると私は胸が痛みどうしていいかわからずただおろおろするだけだった。せつかく母の働いた懐かしい場所、安心して休める所に入所できたのに、どうか元気になって欲しいと祈る気持ちで見守るしかなかった。母が入院した初めの病院で苦しんだ時は、必ず元

気になるといふ確信を持って母を励ますことができたが、今度は自信がなかった。戸惑いながら「お母さん、辛いね。」と苦しそうに目をつむっている母の顔を見ながら小さな声で言う私だった。

あそか園に入所して1ヶ月が過ぎた頃、穏やかな顔で目を開けている母の姿が見られるようになった。体調がだんだん安定して来ている様子だった。「お母さんは偉いね。よう頑張ったね。」と私は母を誉めた。母は穏やかな顔で静かに私を見ていただけだったが、ちょうどケアのために母のもとに来た看護師さんと私が和やかに話している様子をうれしそうな表情でながめている母の姿が印象に残った。もう百人一首の歌を聞くのも母には負担になりそうだったので、詠むのを止めた。その代わりに母がまだ家にいる頃、兄が母のために持ってきたトランジスタラジオを母の頭元の台の上に置いて昼間は点けておいてもらうようにした。その年の暑い夏も母は直射日光の当たる窓際のベッドで特に変わった様子もなく無事乗り切ることができた。暑さも少し和らいだ9月中旬の頃だったと思う。私が行くと母は窓側

のほうに向いて横になっていた。窓側に近づいて母の顔を見ると、気持ちよさそうに眠っていた。いつもなら「お母さん、和美が来たよ。」と声をかけるのだがその日は黙って母の顔を見ていた。その時母は気配を感じたのか、ぱっちり目を開け、優しいまなざしで私に微笑みかけたのだ。その時の母の微笑みは、私が今まで一度も見たことのないような優しさと慈しみにあふれていて、疲れが癒されたような気分になった。母はその後また静かに目を閉じて横向きのまま眠っていた。私はいつもするように母の手や足をさすりながら、母はあの優しい笑顔で何が話したかったのだろうと考えていた。それから後は、目を開けていてもあの時のような母の優しい笑顔は再び見ることはなかった。

あの時の母の笑顔は、きつと足りないながらも私なりに一生懸命母に尽くそうとする私への感謝とねぎらいの思いを込めた微笑みだったのだろうと今思うとまた胸が熱くなってくるのである。

窓際のベッドで休んでいる母の様子は部屋の入り口からよく見えた。母はあお向

けになつて天上をじつと見つめていることもあつたが、目を閉じていることが多くなつた。そんな時は、母の手をさすりながら子供の頃よく聞いたことのある童謡を小さな声で歌つてみた。歌の題名は忘れたが、「緑の丘の赤い屋根 とんがり帽子の時計台 鐘が鳴りますキンコンカン メエメエ子山羊も鳴いてます……」とか「私は真つ赤なりんごです お国は寒い北の国……」という歌詞の歌など。母は時々目を開けて歌声のする方に顔を向けたり、目を閉じてじつと聞いたりしているようだった。私はたいてい1時間ぐらい母の側にいて家に帰るが、帰る時は部屋の入り口で振り返つてもう一度母の表情を確かめてみる。そんなある日私は振り返つて母の顔を見た時、目を閉じた母の穏やかな白い顔がくつきりと見え、何か神々しさのようなものを感じて思わず手を合わせた。それから後、帰り際に部屋の入り口で母の方に向かつて、軽くお辞儀をして帰ることが幾度もあつた。

10月中旬のさわやかな秋晴れの日曜日、私は午前中のうちに、あそか園を訪れた。門の入り口を入ると、庭の真ん中あたりで、ヘルパーさんが移動式ベッドの上の人

に何やら話しかけている姿が目についた。日向ぼっこをしている様子だった。私はそれを見過ごして母のいる部屋へと向かった。途中、廊下でヘルパーさんに出会った。ヘルパーさんは私を見ると「安部さんは、庭で日向ぼっこですよ。」と伝えてくれた。さつき庭で日向ぼっこをしていたのは母だったのだと思うとうれしくなった。こんなすがすがしい秋晴れの日に日向ぼっこに連れて出してもらってよかったなと思いつつ庭にいるヘルパーさんに近づきあいさつをした。側に置いてある二台の移動式ベッドには母ともう一人同室の人が仰向けのまま日向ぼっこをしていた。母は気持ちよさそうに秋晴れの青い空をじつと見つめていた。

11月16日（木曜日）は、小春日和のいいお天気だった。私は仕事がお休みの日なので、朝から洗濯をし、ベランダで洗濯物を干していた。10時半頃だったと思う。携帯電話に電話が入った。あそか園の相談員の方からだった。母が危篤であそか病院の応急室に運ばれたという知らせだった。干しかけていた洗濯物をそのまま投げ

出しタクシーに飛び乗ってあそか病院へと急いだ。

母は、病院の個室に移され、酸素マスクをつけて横たわっていた。担当の医師が処置をしてしばらくは大丈夫だということなのでちょっと安心した。すぐに兄達に連絡した。上の兄は勤めのない日でちょうど家にいたのですぐやってきた。母はこの世を旅立つ日、兄も私もちょうど仕事の休みの日を選んでくれたのだと思った。私は母の耳もとに顔を近づけて、「お母さん」と呼びかけ「長い間ありがとう。」と話しかけた。兄も「お母さん、ありがとう。・・・」などと話しかけたが、母はただ目を閉じたまま呼吸をしているだけだった。午後になり姉がやってきた。姉は母の耳もとに顔を近づけ「お母さん、きれいですよ！」と話しかけた。その時、母は目をつむったままだった。姉の方に顔を向け何か言うように口をもぐもぐと動かしただの。「あつ、何か言ってる。」姉は驚いて言った。母はその後すぐまた元の姿勢に戻った。私や兄が何を話しかけても何の反応も示さなかった母だったが、姉の話

しかけに答えるように身体を動かしたのだった。きつと母は、姉といろいろ話したが、しかなかったのだろう。そして姉の言った「お母さん、きれいですよ！」という言葉がうれしかったのだろう。姉のその言葉は、これから天国へ旅立とうとする母にとって最もふさわしい饒（はなむけ）の言葉だったと私は今思うのである。

バイタルチェックのモニターが鳴り始めた。母を見守っていた看護師さんが、「耳は最後まで聞こえますから、何か話しかけてあげてください。」と言った。私は「お母さん、長い間ご苦労様でした。お母さんが15年間働いたあそか病院で最後を迎えられてよかったですね。」と言った。母があそか病院で働いていたことを知らない看護師さんは「ああ、そうだったんですか。」と母の足をさすりながらつぶやいた。午後3時5分、担当の医師が母の臨終を告げた。

母の告別式の日、きれいに化粧して静かに眠っている母の棺の中へ母のお気に入りだったブルーの縞のワンピースと宝物のように大切にしていたあの金色の紙表紙

の百人一首の歌の本を入れた。式場の担当の人が、「お母さんが一番好きだった歌のところを開いて見えるように置いてあげなさい。」と言われたが、母は百首を全部覚えていたのでどの歌が一番好きだったのかわからなかった。本をぱつと開いてみると、小野小町の「はなのいろは うつりにけりな いたづらに わがみよにふる ながめせしまに」の歌が目にとまった。私は、そのページを開いて母の胸の上に置いた。

母は今頃、天国で大好きだった百人一首の歌競技に興じているのではなからうか、などと思ってみるこの頃である。

韓国から帰国して約6年の間、私は母のために何一つ充分なことはできなかった。母ともっといろんなことが話したかった、もっと優しくしてあげればよかったなどと悔やまれることはいろいろあるけれど、母の最期の時まで傍にいてじつと見守っていてあげることができて、帰って来ていて本当によかったと心から思うのである。母は戦中、戦後の激動する時代の渦中で、自分に与えられた運命を素直に受け止め

直面する厳しい現実に耐え、前向きに精一杯に生き抜いて来た。そうして荒波を乗り越えて完全燃焼を遂げ、天国へと旅立つて行った。誇るべき我が母に深い敬意と感謝を込めて大いなる讃美の念を捧げたい。

(平成20年11月16日 母の3回忌の日に)

中野の思い出

私は小学校に入学するまで、島根県雲南市三刀屋町坂本（当時飯石郡中野村大字坂本）の伯母（父の姉）夫婦の家で育った。

中野の家のすぐ前には、野菜畑があり、いつも季節毎の野菜でいっぱいだった。野菜畑と広々とした田んぼにはさまれて、水をいっぱいにたたえて、さらさらと流れる小川があつて、ところどころにめだかの群れが泳いでいた。その小川の水で畑で取れた野菜を洗っている伯母の姿をよく見かけたものだった。

田んぼの向こう側には、当時大川と呼んでいた川幅の広い三刀屋川が流れていた。中野の納屋に母がいる頃は、二人の兄について、大川によく魚釣りに行った。魚釣りといっても、私は側の浅瀬で小さな雑魚を手ですくって遊ぶくらいのものでしたが、楽しかった思い出として記憶に残っている。魚釣りに行く時、兄は長い天蚕糸（て

ぐす)の釣り糸の先に釣針のついた釣竿を持って出かける。私も一緒に家の近くの畑や田んぼで魚の餌にするミミズをたくさん取って小さな空き缶の中に入れ、兄の後ろからちよこちよこついで川へ向かう。川に着くと兄は魚が釣れそうな場所を選んで大きな岩の上に立って釣り糸を垂らす。魚はあまり釣れないことが多かったが、釣れた時は、水を少し入れた小さなバケツの底で鮎(あゆ)とかうぐいとかいう魚が4、5匹泳いでいた。私は側の石の上で、川の水溜りに手を突っ込んで小魚をすくったり小石をひっくり返して小魚を探したりして遊んだ。川で遊んだそんなある日、兄が側に来て「家へ帰るぞ」と私に声をかけた。はっとして立ち上がると辺りはもう薄暗くなっているのに気が付いた。水遊びに夢中になって日が暮れるのもわからなかったのだ。私は急に寂しくなった。もうずいぶん長い間家に帰らなかつたような気がしてきた。あのお伽話の浦島太郎が家に帰った時、故郷はすっかり変わってしまったように、もう私の帰る家も無くなってしまったのではないかと思つた。兄が二人、側にいるのに私は急にしくしくと泣き出してしまった。

先頭になって大急ぎで川岸を上りしくしく泣きながら帰りの道を急いだ。「なして泣く？」と後ろで兄が言う声が聞こえたが、私は前方にある伯母の家を確かめるのに必死だった。目の前に灯りのついた伯母の家が見えて来ると、ほっとした私はその時ようやく泣き止んだのだった。

中野の伯父は、時々大川に行つて浸け針や瓶浸けをして魚を取つて来ておかずの足しにしたり酒の肴にした。伯父は夕方陽が沈む前に浸け針や瓶浸けをしに川に出かけて行つた。その時は私もよく伯父について行つたものだった。

浸け針は、うなぎが産卵のために川に上つて来る夏の季節に、流れの緩やかな大きな岩陰の2、3箇所につけられた釣針を浸けて釣り糸を小枝や石などに結びつけて固定し一晩置いてうなぎのかかるのを待つ釣り方だった。あくる朝早く浸け針を上げに行くのだが、うなぎが釣れているといいなと期待しながら伯父の後に行つた。3箇所の浸け針のうち1箇所ぐらいはうなぎか、なまずがかかっていることがあつた。大きなうなぎが取れた時は、伯父もとてもうれしそうだった。伯父

は家に帰ると、すぐそのくねくね、によるによるするうなぎをまな板の上に載せ、頭のとつぺんにスコンと錐（きり）を差し込んでまな板に固定してうなぎをさばぎ始める。うなぎは頭を切られた後も体をくねくね動かしていた。蒲焼きにして食べたそのうなぎは、脂（あぶら）がのつていてほつぺたが落ちそうなほどおいしかったことを覚えてる。

焼いたなまずの身も一口食べてみたことがあるが、脂がなく、水つぼくて、ぜんぜんおいしくなかった。

瓶浸けの瓶は、大きなフラスコのような形をした透明なガラス瓶で一方の口は、瓶の内側の方に丸くだんだん細く入り込んでいて、魚がいったん中に入ると外に出られなくなるように作られていた。もう一方の口は、広くて魚が取り出しやすくなっていて、水を通しやすい薄い布切れなどをかぶせ、紐で瓶のふちに結び付けてあった。伯父は川虫などのえさを入れたその瓶を、流れの緩やかな場所を選んで、膝の少し上ぐらいまで川の水に浸かりながら川底に沈めておいた。あくる朝、伯父が

川底から瓶を引き上げると、たいてい5、6匹ぐらいの大小の雑魚が瓶の中で泳いでいた。伯父はそれを天ぷらにして酒の肴にした。私は雑魚はおいしくないので食べなかった。

冬になって雪が積もると、家の後ろの畑の傾斜で兄達は竹スキーをした。私は木の板箱の両端に竹を付けたそりに乗って遊んだ。霜焼けで紫色に腫れ上がった手がかじかんで痛かったが、両手に、はあはあと白い息を吹きかけて夢中になって遊んだ。兄には近所に同じ年頃の友達が一人いたので、遊びに行く時は一緒に歩いて行って遊んだこともあった。

お祭りやお正月が近づくと、伯母はよく豆腐を作った。私は伯母が台所で軟らかくした大豆を石臼でひいているのを見かけると、「手伝ってあげえわ。」と言って伯母と代わって石臼を回し始めるのだが、2、3回ぐらい回すと重くて止めてしまうのだった。私が手伝えるのは、煮た豆汁を大きな布袋に入れ、こして豆乳を作る時

だった。伯母は豆汁を入れた布の袋の口を手でねじってこしてから上に豆腐箱のふたを置き、その上に細長い板を載せて両端の上から押しつけてしっかりと汁気を絞りきる時だった。伯母が細長い板の片方の端を両手で上からしっかりと押さえ、私はもう片方の端の方に腰掛けて重しの代わりとなった。

そうして桶の中に溜まった豆乳に、にがりを入れ四角い大きな豆腐箱に移してふたをし、石の重しをのせてしばらく置くと固まって豆腐が出来上がった。伯母がお手伝いをしたご褒美に豆腐箱に移す前ににがりを入れて少し固まりかけた豆乳をカップですくって私に飲ませてくれたことを覚えている。

お正月に家族が全員母屋に集まってご馳走のいっぱい並んだ長いテーブルを囲んでお雑煮を食べたことがある。私はみんなが集まって一緒に食事ができるのがうれしくてたまらなかつたが、お正月に家族と一緒に集まって食事をしたのはその時一度だけしか覚えていない。

中野の納屋にいた母と二人の兄がいなくなると、私の遊ぶ範囲も狭まってしまっ

た。一人で川に行くのは怖いし、近所に同じ年頃の友達もいないし、一人ぼつちになつた私の遊び相手は放し飼いの5、6羽の鶏と裏山の森の木々だつた。鶏と仲良しになりたくて、そつと家の後ろにある蔵の中に入り、大きな桶の中に貯蔵してある小麦を一握り取り出して「コーコーコー」と鶏を呼んだ。裏の畑や庭で餌をあさつていた鶏は私の呼び声でちよこちよここと走つてすぐ集まつて来た。ばらまいた一握りの小麦を「コッコッコ」とうれしそうな声で鳴きながらついばむ鶏を見て私は楽しんだ。ある日、私が蔵から持ち出した一握りの小麦をちよこちよここと鶏にばらまいているところを伯父に見つかつてしまった。

伯父は笑い顔で「こらこら。いけん、いけん。」と言つただけだつたが、しばらくして伯母が私の側に来て、「鶏にえさやのやめなはい。こーから蔵なんかに入つちやいけんよ。」ときつい顔で私をさとした。

その頃、伯父は、中野村の役場に勤めていたようだが、細い木の枝のむちで牛のお尻を叩きながら鋤で田んぼを耕している姿をよく見かけた。私には優しくて一度

も怒ったことがなかった。普段はほとんど話したことはなかったが、お酒が少し入ると機嫌がよくなつて、仕事から帰つて来ると「あつちゃん、遊ばあこい。」とにこにこしながら私に声をかけてくれた。「あつちゃん」というのは、私のあだ名だった。どうして「あつちゃん」と言つたのか覚えていないが、私は自分のことをいつの間にか「あつちゃん」と呼んでいた。

伯母にきつくさとされて蔵の麦を持ち出せなくなつた私は、庭で餌をあさつてゐる鶏にそつと近づいて抱つこしてみようと思つた。ところが、私が近づくとみんな逃げ出してしまった。そこで逃げ出す鶏の1羽に狙いをさだめて追い回すとその鶏は「もう、降参」と言わんばかりに口ばしを開けてはあはあと息を切らしてしやがみこんでしまった。私はその鶏を抱き上げた。それは白羽の雌鶏だったが私が抱つこして歩くにはかなり重かつた。私はすぐ側の物干し竿にかけてあつた古い大きな布風呂敷をさつと引き取つて、それに鶏を首から上だけを出して包み、それを背中におんぶして歩いた。振り返つて首を出している鶏の方を見ると、驚いたのか、怖

いのかその白羽の鶏は鳴き声一つ出さず長い首を伸ばしたり縮めたりしながら目を白黒させていた。今、その時の光景を思い出すとこっけいに思えて自然に笑いが込み上げてくる。

鶏を遊び相手にしても一つも楽しくないので、それきり鶏と遊ぶのは止めてしまったが、夕方になると全部の鶏が牛舎の上の止まり木にちゃんと止まっているかを確かめるといふ私の役目は怠らなかつた。朝早く伯父か伯母が牛舎の戸口の戸を開けておくと、毎朝鶏は止まり木から牛舎の扉の上を伝って土間に飛び降り餌をあさりに外に出て行く。夕方薄暗くなり始める頃には、牛舎に戻ってくる。私は、鶏が戻つて来る前に、太い縄をらせん状に巻いた太くて長い竹の棒を牛の出入り口の木の扉に斜めに立てかけておく。戻ってきた鶏はその竹の棒に巻いたららせん状の縄を足場にして木の扉の上まで竹の棒を伝つて上り、牛舎の壁の上側に取り付けた止まり木に飛び移つてそこで寝るのが習慣になっていた。丸々と太った雄鶏や雌鶏が竹の棒をえつちらおつちらと上つて行くのはまるでサーカスの綱渡りを見ているよう

で、おもしろかった。ほとんどが失敗することなく上手に上つていくが、たまに上る途中で失敗して「ココツココツ」と鳴きながら落ちるのもいた。失敗するのはたいてい若鶏だったが、上るのに成功するまで何度でも同じことを繰り返して最後には必ず止まり木に止まった。全部の鶏が止まり木に止まったことを確かめてから、立て掛けた竹の棒を片付け、牛舎の戸口の戸を閉めるとその日の私の役目は終わった。

私は、裏山の方にも行つてみた。森の中に入る坂道の入り口に小さな椿の木が一本あった。ある日裏山の方に行くと、その椿の木は丈も低く幹も細いのに真つ赤な花をいっぱい咲かせていた。「こんには。椿さん、真つ赤な花、きれいだね。」と話しかけた。椿の花は、散る時に咲いたまま首のところからぼとりと落ちるので飾る花としては使われないと聞いたことがあったが、その時私の見た椿の花は、ひっそりとした自然の森の山陰に真つ赤な花をいくつも付けて誇らしげに咲いていて「きれいでしょ。私を見てちょうだいね。」と言っているように思えた。森の中に入

ると辺りはしーんと静まり返っていたが、なんだか森の精に守られているような気がして心が安らぎ、一つも寂しいとは思わなかった。森の坂道を下りて家に帰る時は、「また来るけんね。椿さん。」とあいさつをして帰った。

裏山の森の坂道を上り、薄暗い茂みの小道を通り抜けるとぱつと視野が開けなだらかな丘に出る。そこには桑畑と麦畑があった。ある日一人で森の小道を通り抜け丘の畑のところまで上ってみた。上るとすぐ目の前の桑畑に、青い大きな葉っぱをいっぱい付けた桑の木に紫色に熟した桑の実がすずなりに生っているのが目についた。私は、紫色に熟した桑の実を採って食べながら、母がまだ中野の納屋にいた頃、母といっしょにここに来て桑の葉をいっぱい摘んだ時のことを思い出した。摘んだ桑の葉は母が大きな竹の背負いかごにいっぱい詰め込み、私は小さな背負いかごに軽く半分くらい入れて家まで背負って帰った。母がいる頃、中野の家では養蚕の仕事もしていた。養蚕の時期になると母屋の表側の縁側のある部屋が養蚕室になった。昼一昼弱の大きな木の箱の中にわらを敷いて床が作られ、蚕の幼虫はそこで育てら

れた。はつきりとは覚えていないが、その蚕の床は3段ベッドのようになったものが2、3台ぐらいあつたような気がする。蚕が1、2センチくらいの小さい幼虫の時は、桑の葉を細長く切つて幼虫の上にばらばらと振りかけて与え、幼虫がだんだん大きくなると葉っぱをそのまま幼虫の姿が見えなくなるくらい上に載せて与えた。長さ5、6センチほどの幼虫がいつせいに桑の葉っぱを食べる時はまるで小川のせせらぎのようにサワサワ、サワサワという音となつて聞こえてきて心地よかつた。

丘の上の桑畑で、一人で桑の実を食べながら、桑の葉を母といつしよに摘んだ頃のことを思い出すと、だんだん寂しくなつてきた私は、まだいっぱい残っている鈴なりの桑の実を残したまま、森の坂道を下り家の方へと帰りを急いだ。

伯父や伯母は、朝まだ暗いうちに起きて仕事に出かけた。伯母は、牛の餌になる草を刈りに田畑の土手に出て行つた。私が朝目を覚ますと、家の中はがらんとして静まり返つていた。私は起きるとすぐ寝巻きを着替え、庭に出て田んぼの土手の方を向いて伯母の姿を探した。草刈りをしている伯母の姿を確認すると安心して家の

中に入り、おとなしく伯母の帰りを待った。たまに、いつもいそうな場所に伯母の姿が見当たらないと、不安になって庭を走り回って伯母を探す。それでも見当たらない時は、「おばさーん、おばさーん」と泣きそうな声を出しながら家の近くを走り回って探す。そうすると「はい、はい。どげした、どげした。」と言いながら納屋の中からひよつこりと伯母が現れたこともあった。ある夏の日の明け方、私はいつもより早く目が覚めた。その時伯母はちょうど草刈りに出かけようとしているところだった。私は「あっちゃんも一緒に行く、行く」と伯母にせがんだ。伯母は仕方なく私を連れて草刈りに出かけて行つた。家の前の川のほとりの土手に着くと、伯母は私のために持ってきた小さなござを草の上に敷いて、「ここで休んじようなはい。これを上にかけて。」と言って伯母がよく使っている黒い毛糸で編んだ肩掛けをござの上に置いた。伯母が私の休む場所まで用意してくれたんだと思うとうれしくて「うん」と元気な返事をして、すぐそのござの上に仰向けになり、その上に毛糸の肩掛けを頭からすっぽりかぶつた。近くに伯母がいるので安心した気持ちに

なつて黒い毛糸の肩掛けの下でもぞもぞしていたが、その時ふと荒い網目の隙間から朝の光が差し込んで来るのに気がついた。肩掛けを少しずつつ動かすと、その光は青くなつたり白くなつたり赤く見えたりしてまるで光のパノラマを見ているようだった。「さあ、帰—よ」と言う伯母の声で私ははつと目を覚ました。毛糸の肩掛けの下で光のパノラマを楽しんでいるうちにいつの間にか眠つてしまつていたのだつた。

伯母は、草刈りを終えて家に帰るとすぐ朝ご飯の仕度にとりかかった。かまどで炊いたご飯が炊き上がると、毎朝炊きたてのご飯をまず仏壇にお供えした。

伯母がふんわりと湯気のたつほかほかのご飯をお供え用の茶碗に盛り、お膳に載せて私に渡すと私はそれを表の客間に備え付けられた大きな金色に輝く仏壇にお供えして手を合わせた。そうしてその日一日が始まるのだつた。

ある日の夕方、仕事から帰って来た伯父が「これ、見なはい。」と言って、薄い一冊の本を私に手渡した。見ると黄色い表紙に桃太郎の絵がきれいに描かれた「もたろう」の絵本だった。桃太郎のお伽話は夜寝床の中で伯母から聞いたことがあったが、絵本を見るのは初めてだった。私は小躍りして喜んだ。そうして「もたろう」のお話を最初から最後まで何度も繰り返し繰り返し読んだ。そのお話は8・5調と7・5調で書かれていてリズム感があったので、2、3日も経つとすっかり覚えてしまつて絵本を見ないで口ずさんだりするようになった。今でもその絵本の絵とお話は最後のページまで覚えている。

絵本の最初のページは、おばあさんが川で洗濯をしているところと川上の方に少し赤みがかつた大きな黄色い桃の絵が描かれ、左上の方に小さく山で芝刈りをしているおじいさんの絵があった。そして右上の方からひらがなで大きくお話が書いてあった。

おてんきよいから かわのきし
あさからばあさん おせんたく
ところへもものみ どんぶらこ
ながれてきたのよ どんぶらこ

次のページは、二つに割れた大きな桃の中に子供の桃太郎が立ち上がって万歳を
して、両側でおじいさんとおばあさんが喜んで笑っているところが描かれ、お
話は

ひろってかえった もものみの
なかからうまれた ももたろう
これはこれほど よろこんだ
じいさんばあさん よろこんだ

という具合に。

絵本を読む楽しさを覚えた私は、時々伯父に「本買って。」とせがむようになった。その後伯父は「したきりすずめ」「こぶとりじいさん」「一寸法師」「安寿と厨子王」「なかよし」などのお話の絵本を買ってきてくれたが、なぜか初めて読んだ「ももたろう」の絵本ほどには面白さは感じられなかった。

その頃は、中野の家の近くにお店がなかったので必要なものは、伯父がお店のある坂本橋（さかもとばし）というところまで自転車で行って買って来たようだ。一度だけしか記憶にないが伯父が自転車のサドルの前に付けた子供用の腰掛けに私を乗せて坂本橋のお店に買い物に行き、私に飴玉を買ってくれたことを覚えている。

中野の家の方には、たまに行商のおじさんがやってきた。年に一度か二度富山の薬売りのおじさんが来て、家の常備薬として置いてある薬箱の薬を新しい薬と取り替えたり、使った薬を補ったりして伯母としばらく談話をして帰って行く。普段は人の出入りがなくて寂しかった私は、薬売りのおじさんが大きな四角い風呂敷包み

を背負つてやつてくるとうれしくて伯母の後についてちょこちょこ動き回つた。玄関の板敷きに腰掛けて待つてゐる葉売りのおじさんのところに葉箱を持つて行つたり、おじさんが葉箱の紙袋に入つた葉を取り出して確認しながら伯母と話合つてゐる様子や、大きな風呂敷包みの箱の中から新しい葉を取り出して入れ替えたりする様子を、正座して応対する伯母の後ろで肩越しに見て楽しんでゐた。葉売りのおじさんが風呂敷包みの箱の中から葉を取り出す時、プーンと漢方薬のようなおいがして気持ちよかつたことを覚えてゐる。

ある日、普段着や肌着など衣類を売る行商のおじさんがやつて来たことがあつた。伯母の後について玄関に出ようとすると私に伯母は「あつちに行つちよなはい。」と言つて手で制した。子供を出しに押し売りされると困るからだと察しがついた。私は行商のおじさんに見えないように、台所の出入り口の障子の陰でじつとして二人が話すのを聞いていた。行商のおじさんは衣類をいろいろ取り出しては伯母に勧め、伯母はそれを「まだ、ありますけん。いいですわ。」などと言つて断つていた。

伯母がいくら断つても行商のおじさんは買ってもらうまでは帰らないという風に次々と衣類を取り出しては勧めていて伯母は困っている様子だった。私は「要らないと言っているんだから帰ればいいのに。」と思いつながらだんだんいらいらしてきた。いったいどんなおじさんだろうと顔が見たくなつて、障子の陰からつい頭をひよつこりと出してしまった。目敏くそれを見た行商のおじさんは、とつきに「それじゃ、お嬢ちゃんにこれにしましょ。」とか言つて女の子のはくズボンをさつと取り出した。私は欲しくなかつたので「要らない！」と言いたい気分だったが、伯母はすぐそのズボンを受け取つてその代金を支払つた。

行商のおじさんが帰り、伯母はやつと解放された気分だったのでだろう。私には何も言わなかつた。伯母が無理やりに買わされたズボンはどんな色だったのか、その後そのズボンをはいたかどうかは全く覚えていない。

私が4歳くらいの頃のある日、伯父が昼間家にいたから多分日曜日の午後だった

と思う。玄関の方で話し声が聞こえるので出てみると、一人のおじさんが玄関の板敷きに腰掛けて伯母と和やかに話していた。「電器屋さんのおじさんだよ。」と伯母が言ったので私はぴよこんと頭を下げた。おじさんは「おう。お譲ちゃん、こんちは」と笑顔で答えてくれた。私はその場にいてもつまらないので奥の部屋にいる伯父のところに行ったり、居間に行ったりしてまた、玄関のところに行ってみた。すると電器屋のおじさんが何やら四角いきれいな木の箱のようなものをいくつか取り出して伯母に説明しているところだった。箱の下の方に黒い大きなぼたんのようなものが三つくらい付いていておじさんがそれをつまんで回すと、なんと箱の中から人の話し声が聞こえたり、歌声が聞こえたりしているではないか。おじさんは「こーからは、お宅さんとも、一つ置いちよかれえとええですがね。」と伯母に買うように勧めているようだった。伯母は電器屋のおじさんの説明を聞きながらどうしようかと迷っている様子だった。「ラジオ」とかいうその音の出る箱が、私はもう欲しくて欲しくてたまらなくなつた。「買わーや、買わーや（買いましょう）」正座して

電器屋のおじさんの話を聞いている伯母の横に走り寄り、伯母の肩をちよんちよんとたたいて熱心におねだりした。伯母一人では、決めかねているようなので、絶対に買ってもらわなければならぬと思つた私は、奥の部屋にいる伯父のところへ走つて行つた。座つて何か読んでいた伯父の側によつて「ねえ、買わーや、買わーや」と必死になつて伯父に頼んだ。伯父は、驚いたように苦笑いをしながら、「何かいな、何かいな。」と言つて立ち上がった。私は、とつさに伯父の手をつかむと電器屋さんのいる玄関の方へと引つ張つて行つた。私の熱心なおねだりが効を奏してとうとうその音の出る木箱は、家に置かれることになつたのだつた。

そのラジオは、奥の部屋の入り口のたんすの上に置かれ、伯父がスイッチを入れたり切つたりした。昼間はラジオを聞くことはなかつたので、私は今までと同じように一人ぼっちだったが、夕方になつたらラジオが聞けるといふ楽しみができた。ラジオの放送が始まる頃になると家の中が急ににぎやかになつたような気がしてうれしかった。

夕方5時頃になると子供向けの放送番組が始まった。今、覚えているのは連続放送劇の『笛吹き童子』と『紅孔雀』である。放送が始まると、まずテーマソングが流れる。『笛吹き童子』の方は、最初の「笛吹き童子 笛吹けば……」ぐらいしか歌詞を覚えていないが、『紅孔雀』の歌詞は「まだ見ぬ国に 住むという 赤き翼の孔雀鳥 秘めし願いを知るといふ 秘めし宝を知るといふ」だったと思う。子供向けの放送が終わった後、覚えているのは『向こう三軒両隣』花菱アチャコや難波千恵子が出る『お父さんはお人好し』などの連続ドラマやお笑い番組の『難波演芸会』などである。私にはよくわからなかったが、伯父が『難波演芸会』の放送を聞きながら、時々一人で笑っていたことを覚えている。昼間はラジオのスイッチを入れることがなかったので、放送時間はどれくらいあったのかは知らないが、夜は9時頃になると、放送の終わりを告げる「……ラジオのおしまい……」とかいう歌声が流れてその日の放送は終わった。

毎年秋になると、収穫を祝う村の神社の秋祭りが行われた。神社は、裏山の丘の桑畑の向こう側の高台にあったので、お参りする時は裏山の坂道を通って近道で行った。参道や境内の脇には出店が並んでいてそれを見て歩くのが楽しみだった。色紙や紙の着せ替え人形、ビー玉、ぺったり（面子）など子供のおもちゃや飴玉や焼き饅頭などの食べ物のお店が出ていた。伯母に綿菓子を買ってもらったことをぼんやりと覚えている。

秋祭りには、中野の家からバスで30分くらい行ったところにある掛合町に住んでいる伯父の従兄弟（いとこ）にあたる人がいつも一晩泊まりでやって来た。その人はその頃50歳前後ぐらいだったと思うが、私はその人を「掛合のおじさん」と呼んでいた。掛合のおじさんは、掛合の町役場に勤め、おじさんの家ではその町で小さな雑貨店を開いていた。

毎年お祭りの日が来ると、お祭りのご馳走がいただけるのもうれしかったけれど、それよりも掛合のおじさんがやって来るのが楽しみだった。おじさんはやって来る

と、いつもにこにこして私に話しかけてくれた。お酒が大好きで、伯父と二人で飲みながら顔を真っ赤にして愉快地話し始める。伯父もお酒が好きだったので二人は意気投合し夜遅くまで飲んで愉快地過ごしたものだ。私もその日は、いつもより遅くまで起きていていっしょにご馳走を食べたりお酒のお酌をしたりした。私がお酌をするに掛合のおじさんはとてもご機嫌で「和美ちゃんはいいい子だ、いい子だ」とほめていろいろと話しかけてくれた。

私が5歳の頃のお祭りの時だったと思う。掛合のおじさんは、その日も伯父といっしょにお酒を飲んでご機嫌だった。私が側に行くと、いつものように「和美さんはいいい子だね。」とほめて「おじさんの家にああ、ふくらませえとこげん大きいなあ風船がああよ。欲しかったらあげえよ。」と言って両手を胸の前に上げて丸く輪を作ってみせた。私は子供心にも、おじさんはお酒に酔っているから大げさに話していると思ったので、「うそだ。酒に酔っちゃるけん、そげなこと言いなはあでしよ。」と言うと、おじさんは「うそじゃないけん、本当だけん。酒にや酔っちゃつてもこ

の話は本当だけん。赤や青や黄色やいろんな色の風船がいっぱいああよ。」と言った。おじさんの話は本当なんだと思うと私はその風船が欲しくてたまらなくなってきた。「風船、欲しい、欲しい」と言うと、おじさんは、その風船を伯父の家の隣のおじさんにことづけてくれることになった。

伯父の家の隣の家の息子さんが掛合の役場に勤めているので、その息子さんにすぐのことづけてあげるといふのだった。そして忘れないで必ず届けることを私と指切りをして約束した。

私は、次の日から毎日、隣のおじさんから風船が届くのを待った。夕方になって隣のおじさんが仕事から帰って来る頃になると外に出て前庭を行ったり来たりした。三日経っても隣のおじさんはやって来なかった。もしかして隣のおじさんが届けるのを忘れているのかもしれないと思い、隣の家に行っておじさんに「掛合のおじさんから私にことづけてものはないですか。」とたずねてみた。おじさんは不思議そうな顔で、「何も無いよ」と言った。私はがっかりしたが、掛合のおじさんは、

必ず届けると言つて私と指切りまでして約束したのだから必ず届けてくれることを信じて疑わなかつた。今日は届くだろう。明日は届くだろうと毎日毎日待ち続けたが、一週間過ぎても隣のおじさんから風船は届けられなかつた。

私が、毎日毎日風船の届くのを待つてゐる姿を見るに見かねたのだろう。後でわかつたことだが、伯父が隣の息子さんに事情を話して掛合のおじさんから風船を届けてもらうように頼んだらしい。一週間が過ぎたある日、隣のおじさんから風船が届けられた。玄関先で伯父と隣の息子さんの話す声が部屋の中で遊んでいた私の耳に聞こえてきた。掛合のおじさんは私と風船の約束をしたことなど全く覚えていなかったということだつた。お酒に酔つてご機嫌になつて私と約束をしたのだが、酔いが醒めたらすっかり忘れてしまつていたのだつた。

私は隣の息子さんの話をふすま越しに聞いて何とも言えない寂しい気持ちになつてしまつた。今まで友達のような親しみを感じていた掛合のおじさんが、遠いところに行つてしまつたような気がした。中野の伯父もお酒好きで、お酒に酔つて話し

たことは酔いが醒めた時は覚えていないということは知っているので、酔いが醒めたら忘れてしまっているということも理解できた。でも、掛合のおじさんは、隣のおじさんに必ず届けると、おじさんの方から先に指切りしようと言つて約束をしたのだから、酔いが醒めて忘れていたとしても私のことを思つていてくれるならまた思い出してきつと届けてくれるだろうと信じていた。そう思つたから毎日毎日、一週間以上も隣のおじさんが風船を届けてくれるのを待ち続けたのだ。そういう自分の姿がその時はみじめに思えてならなかつた。あれだけ待ちに待つていた風船が届けられても、もううれいとは思わなかつた。そして私がかもし約束を守らなかつたら、相手の人も今の私のように寂しくてみじめな気持ちになるだろう。私は約束したことは必ず守らなければいけないと心の中で強く自分に言い聞かせたのだつた。

隣のおじさんによつて届けられた風船は、お祭りの晩に掛合のおじさんから話を聞いて私が予想していたものとはあまりに違つていた。それは長さ12、3センチの薄いゴムひものようなものだつた。ふくらませると両手で輪を作つたくらいの大

ききになるということだったが、ふくらませてもそんな大きさになるはずもなく、それをピンポン玉ほどの大きさにふくらませるのも私には並たいていのことではなかった。ありつたけの力で息を吹き込んでだいぶ大きくふくらんだなと思ったとたんにパンと裂けてしまうのだった。

風船は全部裂けてしまったのか、それともふくらませるのをあきらめて捨ててしまったのか、今は覚えていないが風船はすぐに私の前から姿を消してしまった。だが、「約束」という深い重みを持った言葉は、一つの教訓として私の心の奥に残っている。あのお祭りの日以来、掛合のおじさんには再び会うことはなかった。私の中野での生活も終わりに近づいていたからである。

翌年、雪が溶け春の訪れを感じるある晴れた日、私は伯父に連れられて中野村の小学校に行った時のことをぼんやりと覚えている。

人が一列に並んでしか歩けないような細い小道を、野を越え山越え歩いて歩いて

やつと家の立ち並んだ少しにぎやかなところに出てきた。ここからなら小学校ももうすぐだろうと思ひ、歩き疲れて座りたくなるのを我慢して一生懸命歩き続けた。私には一里以上は歩いたように思われた。やつと小学校の校舎のある所にたどり着いた。校舎の中に入ると座つて休む間もなく、忙しそうに應對している中年の女の人から名前を聞かれ前へと押しやられた。それから何をしたのか順番は覚えていないが、椅子に座つた中年の女の人が、事務的に「はい、これは？」と言つて私の目の前にさつと一枚の色紙（たぶん赤色だつたと思う）を差し出した。とつさに「これは？」と言われても、色紙であることも赤色であることもわかるのだが、何と答えたらいいか迷つてゐると、後ろの方で伯父が「何色か言いなはい」と言つてくれた。色紙を持つた手を引つ込めようとしていた女の人に、急いで「赤」と答えると、女の人は「これは？」、「これは？」と次々に色紙を差し出した。まるでスピードゲームをしているかのように矢継ぎ早に尋ねられて「むらさき！」「みどり！」「ももいろ！」と舌をかみそうになりながら必死に答えたことだけは記憶に残つてゐる。

帰りはどのようにして家に帰ったのか全く覚えていない。たぶん疲れ果てて伯父の背中であぐらをかいていたのだろう。気が付くと、家に帰って来ていて伯父が「こまい、こまいもんだったわ。(小さい、小さい者だったわ)」と情けなさそうな表情で伯母に話していた。私のことを話しているんだなと思ったが、その後伯父も伯母も私には何も言わなかったので、気にはしなかった。

中野の伯母夫婦は、私をできれば中野村の小学校に通わせたかったのだと思う。それで伯父は、私を小学校入学前の面接試験？に連れて行ったのだが、他の子供達と比べて見て私がいかに小さく見えたのだろう。片道だけでも4キロ以上ある細い山道を小さい、小さい私が一人で通うのは無理だと判断したのだろうと今その時のことを振り返ってみる。

その年のいつ頃だったかは覚えていないが、今まで一度も会った記憶のない鳥上の叔母(父の妹)が、中野にやって来て、お祭りの日ではないのに神社にお参りに行ったことがあった。伯母姉妹は、裏山の坂道を登りながら何やら話していたが、

鳥上の叔母は時々私の方をちらちらと見て「姉さんは、ようやあなはったわね。（よくやりなされたわ）」と言っているのが聞こえた。鳥上の叔母は、私には一言も話しかけることもなくその日のうちに帰って行った。その後、また今まで会った記憶のない三成の伯母（父の義理の姉）が来て、同じようにお祭りでない日に中野の伯母と三人いっしょに神社にお参りした。そして三成の伯母も私とは一言も話すこともなくその日のうちに帰って行ったのだった。こうして私の知らないうちに小学校入学以後の私の生活する場所が決められていたのだなと今気付かされるのである。

私が母親のように甘えることのできた中野の伯母は、昭和32年5月17日この世を去った。私が中学1年生の時だった。その頃三成に来ていた母が、中野に行つて伯母が亡くなるまで側に付いていて看病したという。

伯父は他の人には厳しい人だったというが、私には、一度も叱つたことのない優しい伯父だった。その伯父は、私が高校2年生の時である昭和36年4月5日に他界

した。

三成小学校に入学するまで、幼い頃を過ごした中野での生活は、優しかった伯父、伯母への追憶と共になつかしい思い出となつて今も心の中に生き続け、果たし得ぬ私の未来への憧れへとつないでいる。

私のふるさと

目をさますと鳥のさえずり

森に入ると小鳥が飛んできて肩に止まる

森の精たちと楽しい語り合いのひととき 過ぎ行く時を忘れる

春はすみれ、たんぽぽ、つくし、ふきのとうとこんには

夏は丘の上の本陰でうさぎやりすとたわむれ

秋は裏山に咲くききょう、なでしこ、おみなえしと無言の対話

冬は真っ白な銀世界で犬ぞりを走らせる

豊かな自然のふところに包まれて安らかに生きる

そんなふるさとに私は住みたい

(1996・11・15・ソウルにて)

スピードで走り行く車の騒音、せわしく行き交う人々、満員電車での通勤など都会の日常生活の喧騒(けんそう)の中で、幼い頃に過ごした中野の山や川、そして動物達のいる豊かな自然は、私の理想郷となつて仕事で疲れた私の心を癒してくれるのだつた。

(平成21年1月24日)

三成の思い出

私が小学校に入学した時から中学校を卒業するまで過ごしたのは、今の島根県仁多郡奥出雲町三所（当時は、仁多郡三成町大字三所字石原だったと思う）だった。記憶は定かではないが初めて三成に行ったのは、小学校入学前だったと思う。その時はまだ祖父（父のお父さん）が生きていた。病身だったようで、背を丸くしてこたつにあたっている祖父にあいさつすると力なく微笑みかけ、小さな声で何か言っていたようだったが私には聞こえなかった。私が小学校に入学した頃は、祖父はもういなかった。祖母がいたが、認知症があるようで私を見ると「あんた、だあかいね。（誰ですか）」とたびたび聞いた。一番最初に聞かれた時は、伯父が「富之助の娘だね。おばあさんの孫ですがね。」と説明した。「おお、そげかね。そりゃかわいいね。」と笑顔で言った。次に顔を合わせた時も、「あんた、だあかいね。」と聞かれ、私は

「おばあさんの孫ですよ。」と答えてすぐ立ち去ろうとした。すると祖母は「あんたにあげえもんがああけん（あげる物があるから）こつちへ来なはい。」と言って自分の部屋に入り、手で私に「おいで、おいで」をした。私が部屋に入ると、祖母は座りながら「ここに座あなはい。」と言って前に私を座らせた。祖母は着ている着物のふところに手を入れ、ごそごそと動かして細長い布の袋を取り出した。「わしが、大事にしまつちよつたけど、お前さんに上げえわ。だあにも言つちやあいけんよ。」と言いながら袋の中から何かを取り出した。見るとそれは、もう使えなくなつた5銭札や1円札など10枚ばかりだつた。私が中野にいる頃、伯父がもう紙切れ同然になつた1銭札や5銭札を私の遊び道具にくれて、ままごとに使つたことがあつた。祖母がそれを取り出した時、「私を本当にかわいい孫と思つてくれているんだな」と思いうれしかった。「おばあさん、今私は使わんけんね。なくなあといいけんけんおばあさんが大事にしまつちよいてごしなさい。」と言うと祖母は、「そげかね。ほんならわしが大事にしまつちよくけん、欲しいなつたらいいなはいよ。」と言って

それを袋に戻し、また着物のふところに納めた。

祖母は体もだんだん不自由になってきて、入浴も一人ではできなくなった。伯母は体が弱かったので、祖母が入浴する時は、伯父が介助したが私はその側で、熱いお湯に水を入れてお湯の温度を調節したり、洗面器にお湯を入れて祖母の体を洗う伯父を手伝ったりした。祖母は私が小学校1年生の秋頃亡くなった。

三成の伯父は、昭和20年8月の大東亜戦争の終戦までは、韓国で公立学校の校長として勤めていた。韓国のどの辺りに住んでいたかはわからないが、私の持っている当時の伯父の写った写真には「道山公普校第四回卒業 昭和九年三月」「雪川公立尋常小學校第十六回卒業記念 昭和十五年三月」と印字されており、最前列中央の椅子にこしかけた鼻ひげのいかめしい顔の伯父がいた。道山とか雪川という地名は現在に残っていないと思うが、伯父の話には釜山（プサン）とか蔚山（ウルサン）とかいう地名がよく出てきたので、韓国の南の方に住んでいたのではないかと推測してみたりする。

伯父夫婦には、子供がいなかったので伯父と十歳以上年の離れた一番下の弟を跡取りとしていた。その叔父は学生の頃、伯父夫婦と一緒に韓国に住んでいたことがあつたという。

三成小学校に入学する時は、中野からいつ、誰が私を連れて三成に来たのか全く覚えていない。たぶん中野の伯母が連れてきて、私に気付かれないようにその日のうちに帰って行ったのだろうと思う。覚えているのは、入学式の日、松江の従姉のお下がりの赤茶色の皮のランドセルを背負い、三成の伯母に連れられて三成小学校の校門をくぐった時のことである。お互いに馴染みがないので並んだまま伯母と手をつなぐこともなく、何となくぎこちなく少し不安な気持ちで校庭を歩いて教室に向かった時のことだけである。

小学校は伯父の家から、ところどころに農家の見える、田んぼや小高い山を挟んだ、やや広い道路を通って3キロ余り歩いた三成の町の中にあつた。

それから毎日学校に行く時は、朝、玄関先で「行ってまいります！」と言い、帰つて来ると「ただいま！」と大きな声であいさつする私の三成での生活が始まった。三成の伯父は、中野で自由奔放に過ごして来た私に、挨拶の仕方から戸の開け閉めまで厳しく躰けをした。夜寝る時は、きちんと座つて「おやすみなさい」とあいさつし、寝間着に着替える時は、服を脱いだ順番にきちんとたたんで頭もとに重ねて置いた。初め頃は厳しく躰ける伯父が怖かったが、だんだん生活に慣れてくると伯父は何も言わず優しく対してくれるようになった。

伯父の家は農業を営んでいたが、私が三成に来た頃は、三成の町に材木工場があり、伯父は毎日自転車を通っていた。よくは分らないが伯父はまた役場の役員か何かもしていたようで訪ねてくる人の相談に応じたりいろいろと人のお世話をしているように見えた。朝は、何時頃出かけるかはわからなかったが、帰ってくるのはたいてい午後4時過ぎだったと思う。家の前の道路を町に出る方向にまっすぐ150メートルぐらい行つたところに公会堂があった。私が、学校から帰つて宿題を済ま

せて庭で遊んでいると、公会堂の前まで続く坂道を伯父が自転車を押して上つてくるのが見えた。時々、近所の同級生の友達遊びに来て庭で楽しく遊んでいても、公会堂の前に伯父の姿が見えると「今日は、もうお別れしようや。」と友達に言う私だった。私が遊んでいても、伯父は何も言わないけれど、遊んでいては何だか伯父に悪いような気がして家のことをしていないと落ち着かなくなるからだった。

夕方になり伯母が夕食の仕度を始める頃になると、私はお手伝いをしようと思いつた。台所に行った。

ある日、台所に行くとき伯母が玉ねぎの皮をむいていた。私も手伝おうと玉ねぎを一個つかんで皮をむき始めた。そのうちになんだか目がひりひりしてきて涙が出てきた。最初はがまんしていたが、どうしても目が痛くなったのかわからなくてとうとう本当に泣き出してしまった。伯母は驚いたように私を見て、それから笑いながら「玉ねぎをはぐと目が痛くなるもんだよ。」と教えてくれた。その時初めて目の痛み

は玉ねぎのせいだったんだとわかって安心したのだった。

時々伯母が台所で民謡などの歌を口ずさんでいるのを聞いたが、とても上手だなと思った。伯母は生菓子を作るのもうまかった。どのようにして作ったのかは見たことはなかったが、お祭りの時などきれいな手作りの生菓子でお客をもてなした。伯母は、きつと韓国で生活していた頃もこうしてお菓子を作つて来客をもてなしていたんだなと思った。

ある日の夕方、私が台所に入ると伯母が流しの前に立っていて、私を見ると流しの方を向き、両手に1本ずつ持った箸で、何かをキンコンとたたき始めた。流しの方に近づいてみると、同じ形のガラスのコップが5個ばかり流しに置いてあり、その中に水が左側から右側へと水の量がだんだん少なくなるように入れてあるのが付いた。伯母がそれを箸でたたくとド・レ・ミ・ファ・ソと鉄琴を叩いているような音が出るのだった。私はうれしくなつて伯母から箸を受取ると学校で音楽の時間に習つた歌を叩いてみた。「ドドレレミミレ　ミミソソ（ララ）ソ」（「白地に赤

く 日の丸染めて……、「ラ」の音がないのに気付くと伯母は、大急ぎでもう1個同じようなコップを用意してくれた。

「ドドソソラソ ファアファミミレド」（「お星様ピカリ ピカピカピカリ……」と夢中になってコップを叩いた。伯母は側でにこにこしながら調理をしていた。伯母は、ある時は庭で一人で遊んでいる私のところに来て、「これ、おじさんに内緒だよ。」と言って、町で買って来た赤いゴム鞠（まり）（ゴムボール）をそつと手渡してくれたら、またある時は、『小学1年生』という雑誌を買って来たりして、私を喜ばせようと努力してくれた。そんな優しい伯母を私はありがたく思ったが、なぜか他人行儀になってしまつて中野の伯母に対したように心を開くことのできない自分がかしかなかった。

小学1年生の1学期が終わつた。終業式の後、教室に戻ると担任の先生のいろいろなお話があり、夏休みの宿題の『夏休みの友』が配られた。それから先生は、「家

に帰ったら、すぐお母さんに渡しなさい。」と言って、一人一人に通信簿というものが渡された。私は「お母さんはいないから、伯母さんに渡すんだな。」と思いつながら通信簿を受取った。

家に帰り、私の勉強部屋として使っていた三畳の間にカバンを置くとすぐ通信簿を取り出して伯母のところを持って行った。その時居間にいた伯母は、私が通信簿を渡すと、すぐに開いて真剣な顔でそれを見始めた。

しばらくして伯父が居間に入ってきた。伯母は通信簿を伯父に渡しながら失望したような顔つきでこう言った。「もう少しいいと思ったのに……。これじゃ、いけないわ。」伯父は何も言わずに黙って通信簿を受取った。

伯母の言葉を聞いたとき「通信簿ってそんなに大切なものなんだ。」と初めて知り「通信簿の成績が良いことがよい子なんだ。」と私は思った。

私の部屋に入り、伯母の言葉を反芻してみた。伯母は通信簿の成績で私を評価したんだと思うと言いたいような寂しさが胸の奥に入り込んできた。そして少しずつ

伯母に近づこうとしていた私の心が伯母からだんだん遠ざかって行くのを感じたのだった。

夏休みに入って幾日か過ぎたある日、母がひよつこりとやつて来た。その頃母は、保健師の免許を取るために松江の看護学校に通っていたが、私が夏休みになったので、松江に連れて行くために来たのだった。すぐに夏休みの宿題や、着替えの服などを調べ、母について元氣よく出発した。

三成駅で汽車に乗り松江へと向かった。ところが、初めは松江に行くつもりで汽車に乗ったのだが、汽車が木次の駅にだんだん近づいて来ると中野に行きたくてたまらなくなってきた。中野に行くなら次の駅の木次で降りなければならぬ。私は突然、母に「中野の伯母さんとこに行きたい。中野に行くう。」と言いだした。母は、驚いたようだったが、止めもせず「一人で行けえかね。」と小さな声で聞いた。今まで木次から中野までは、バスで何度も行き来したことがあるのでよくわかって

いた。「うん」とうなずくと母は黙って私の荷物を網棚から下ろして私に渡した。母は、わずか一ヶ月足らずの夏休みの間だけでも娘といっしょに過ごしたいと思つたであろうに、母の気持ちも分からずに、木次で途中下車して中野に行つてしまつた私だつた。今、その時の母の気持ちを思うと申し訳なくて胸がつかまつてくる。

小学一年生の時の夏休みだつたかどうかは、はっきり覚えていないが、夏休みが終わりに近づき、三成に帰らなければならぬ日の前夜、私は、帰りたくなくて伯母のふところで泣いたことがあつた。伯母は「小さい時に辛抱しておきやあ、大きいなつたらいいことああけんね。」と言つて私を慰めてくれたのだつた。

一年生の2学期が始まり、数日が経つた頃の夜、伯父が部屋で勉強をしていた私を居間から呼んだ。「和美！算数の本を持つて来てみい。」

私はドキツとした。韓国にいる頃、長い間公立学校の校長をしていた伯父から教科書を持つて来いと言われたのだ。1学期の成績がよくなかつた私を特訓するんだ

と思うと、居間に入る前から、緊張して胸がドキドキしていた。

その頃、算数の時間は時計の時刻を読む勉強をしていた。教科書の他に教材用として長針と短針が動くようになってる紙で作った丸い小さな時計があった。

居間には、鉄瓶を載せてお湯を沸かすことのできる金属製の大きな火鉢が置いてあり、その中に金属製の火箸が立てかけてあった。伯父はその一本を抜き取って指示棒として使った。

最初は教科書の復習から始まった。今まで教科書で習った〇時5分、10分、15分、…30分、45分など5分刻みの時刻はすぐ答えることができた。そのうちにまだ習っていない分刻みの時刻に進み、伯父は私が手に持っていた紙時計を指して「8時23分にしてみい」と言った。緊張していた私は、その時頭が真っ白になってしまった。長い針を動かしたり短い針を動かしたり、もたもたしている私を見て、「短い針はどこに置くんのだ?」「ええ?長い針はどこに置くんのだ?」と伯父はだんだんいらいらした口調になってきた。私はますます緊張して目の前まで真っ白になり、

どれが短い針でどれが長い針なのかも分らなくなってしまった。そのうちに伯父の持っていた指示棒がスコンと私の頭のとっぺんで音をたてた。痛かった。やつとの思いで針を合わせたように思うがはつきり理解したわけではなかった。その後、伯父は、7時50分のことを8時10分前ともいうとか、お昼の12時を正午というとか説明した後、質問を繰り返し、私はしどろもどろに答えていた。その時台所にいた伯母が入って来て「もう、それぐらいにしませんか。」と笑みを浮かべて伯父に言った。

緊張してしどろもどろに答えている私がかわいそうになつたらしい。伯父は「そうだな」と言つて私の顔を見てにつこりと笑つた。伯父の笑顔を見たたんじ緊張が一度にほぐれ、目の前がぼつと明るくなつた。伯父は居間にかかつている柱時計を見て、「今、何時だ」とやさしい声で聞いた。私ははつきりとした声で「8時34分です。」と答えた。同時に今まで伯父が私に教えようとしていたことが全部はつきりと理解できたのだつた。

数日後、伯父は同じように居間から「和美！国語の本を持って来てみて。」と言

った。伯父の厳しきは私への愛の鞭であることは分かっているが、やはり（算数の本を持って行った時ほどではないが）怖くて胸がどきどきしていた。

伯父はしばらく国語の本をばらばらとめくって見ていたが、国語の本の一番後ろにある『新しい漢字』のところを開いて「読んでみい」と言っただけに渡した。それを見ると「大 中 小 上 下 左 右……」のように全部漢字だけが記されていて送り仮名はなかった。やはり今まで習った漢字は音読みや訓読みで読むことができた。だんだん読み進んで行くと、そこにはまだ読み方を習っていない「父 母」という漢字があった。私はそこでウツとつまってしまった。訓読みで「お父さん」「お母さん」と読むのは分かるのだが、教科書にはひらがながついていないから困ってしまった。私はあせった。早く読まないとまた伯父の指示棒が頭のとっぺんでスコンと鳴ると痛いのだ。読み方が間違っていることは分かっていたが、私は緊張して悲痛に似た小さな声で「おとう」「おかあ」と「さん」だけを省いて訓読みにした。すると伯父は静かに笑みを浮かべ「それはな、『ちち』『はは』と読むんだ」と優し

く教えてくれたのだった。

伯父は、私が学校で今まで習ったところはよく解っていると思つたからかどうか知らないが、それ以来、教科書を持つてくるようにと居間から私を呼ぶことはなかつた。

2学期も後半になり11月中旬頃になると、学校では毎年恒例の学芸会の練習が始まり、私達は授業が終わつた後練習に励んだ。小学校卒業まで6回行われた学芸会の中で一番印象に残っているのはやはり1年生の時である。ひよこが生まれたにわとりのお母さんを森の動物たちがお祝いに來て歌つたり踊つたりするという劇だった。私はにわとりのお母さんで、ひよこの赤ちゃんやお祝いに來た猿や狸の歌や踊りを見て拍手したりほめたりする役だった。その時のひよこや猿や狸の役をした友の顔を懐かしく思い出す。その時友が歌つた歌は今でもはつきりと覚えていて、その歌の一つを記しておこう。

〈お猿さんが歌ったお祝いの歌〉

おさるの顔が赤い　なぜなぜそんなに赤い

にんじん食べて　草の実食べて

そーれで　そんなに赤い

たぬきの顔が黒い　なぜなぜそんなに黒い

茶がまに化けて　煙にそまり

そーれで　そんなに黒い

冬休みが近づいたある夜遅く、ふと目を覚ますと火鉢を囲んで伯父と伯母が、何かひそひそ話しているのに気がついた。遅くまで起きているんだなと思いつながらまたすぐ寝入ってしまった。あくる朝、目を覚ますと頭元に真っ赤なゴムの雨靴と新

しいノートが置いてあった。何日か前に担任の先生から12月25日はクリスマスとい
つてキリストの誕生を祝う日で、その前の日はクリスマス・イブでサンタクロース
のおじいさんが煙突から入ってきていい子にはクリスマスプレゼントを持って来
るというお話を聞いていた。私は「伯父さんと伯母さんがサンタクロースになつて
プレゼントをくれたんだ。きのうの夜遅く、伯父さんと伯母さんがひそひそと話し
ていたのはクリスマスプレゼントの話だったのかもしれない」と思った。着替えを
し布団をたたんでいるところへ伯父が部屋に入つて来た。「おはようございます」
とあいさつすると、「サンタクロースさんがお土産もつて来たな。」と笑顔で言った。
私は「はい」とだけ答えて顔を洗いに外に出た。

普段は厳格で怖いと思つていた伯父だったが、こんな優しい面もあるんだなど
その時思つた。

伯父は、私が3年生になつた頃は、町の材木工場を閉じて家で農業を営む生活が

多くなっていた。納屋の牛小屋で牛を飼い、鶏も5、6羽放し飼いにしていた。

5月に入り田植えの時期になると、田んぼに水が引かれ苗代が作られた。伯父は苗代の水を含んだ土を鍬（くわ）ですくい上げ、田んぼの畦（あぜ）に置きそれを塗って新しい畦を作った。その後私は土が軟らかいうちに大豆の入った小さな腰籠をつけて畦に大豆をまく仕事をした。伯父から教わったように、畦の土に10数センチ間隔くらいに親指を押し大豆が二つ、三つ入るぐらいの穴を開け大豆をまいた。私は何日か後に畦に蒔いた大豆の芽が土の上に顔を出しているのを見るのが楽しみだった。

田植えの時期になると、学校の休みの日は、私も働きに來てくれた小母さん達といっしょに田植えを手伝った。植え方は伯父に習っていたが、小母さん達の植える速さに合わせるのにはなかなか大変だった。私が遅れると、隣で植えていた小母さんが私の植える分まで手伝ってくれた。腰が痛くなったりしたが、小母さん達が歌を歌ったり、楽しく話をしながら植えたので、私も楽しかった。

伯母は家において休憩時間になると、お茶の入った大きなやかんを提げ、おやつに作ったおまんじゅうや煮物などを運んできてくれた。

春の農繁期が終わった頃だったと思う。伯父夫婦が韓国に住んでいた頃、一緒にいたという壮吾（そうご）叔父が東京見物に来るようにと伯母を招待したらしい。その頃壮吾叔父は、結婚して東京で働いていた。伯母は、東京に行き4、5日三成の家になかった。私は伯母が東京に行く話を聞いていなかっただったので知らずにいたが伯母が東京に出発した日、学校から帰って伯父から聞いた。伯父は伯母が帰ってくる日も話したらしいが、別に気に留めなかったので覚えていなかった。

ある日の午後、学校の帰り道で「家で遊んで帰らん？」と友達に誘われうれしくなって寄り道をして遊んでしまった。いつも家に帰る時間よりだいぶ遅くなって家に帰ると、帰りの遅い私を心配して庭先に立って待っていた伯父が「今日は伯母さんが東京から帰ってくる日だったに、何でこげん遅う帰って来る！」と言って私を

叱った。「伯母さんの帰ってくる日が今日だとは知らなかったのです。」と言いたい気持ちだったが黙って、伯父の後について家に入った。その後どうしたかはよく覚えていない。台所で夕食の仕度をしている伯母のところへ行つて「お帰りなさい」と言つたような気もするし、言わなかつたような気もするし、東京から帰つて来た日の伯母の印象が残っていないのでわからない。

伯母は東京から帰つて来た日に私ที่บ้านにいて伯母の帰りを心待ちに待つていなかったことが、きつと寂しかっただろうと思う。次の日だったような気がするがききな大、小の千代紙と最中のお菓子一つ、伯母が持つてきて「あんまりおみやげないけどこれ」と言つて私に渡してすぐ部屋を出て行つたことを覚えている。

8月のお盆が近くなると、仏様をお迎えるために客間の仏前や床の間の近くに淡い藍色や薄紫色の和紙に涼しげな景色を描いた、いくつもの盆提灯が置かれた。お墓の掃除をして、墓前に盆花をお供えした。お墓は家の前に広がる田んぼを隔て

た山の丘にあった。伯父がお墓の掃除をし、私は山の裏に行つて山の斜面に咲いているおみなえしや桔梗（ききょう）、なでしこ、ふじばかまなどの秋の七草の花を摘んで墓前に供えた。公会堂前の坂道の土手と家の近くの道路の土手に石彫りのお地藏様が祭られていたが、伯父がそこにも花を供えるようにと言つたので、お地藏様の周りを掃除して盆花をお供えた。

お盆のある日、伯父は障子をいっぱい開けた客間の廊下に伯母と私を誘つた。浴衣（ゆかた）を着て、下駄をはき、うちわを持った伯父が庭に立っていた。伯父は笑顔で二人を廊下に座らせ、盆踊りの話をしてから「見ておれよ。」と言つて「さのやんはとない やんはとなあい」と言いながら踊りだしたのだった。

伯母も私も笑顔でそれを見ていた。私は伯父の盆踊りを見ながら心の中で「伯父は私たちを楽しませようとしているんだな。」と思つた。

小学3年生の秋だつたと思う。出雲大社にお参りに行くことになり、朝早く伯父

と伯母と三人で出発した。私はなぜか、あまり気乗りがしなくて何で今日大社にお参りするのだろうかと思ひながら行つた。乗り換えの駅で汽車を待つ間、私が黙つて立っていると伯父がにこにこしながら「今日は結婚記念日だよ」と教えてくれた。伯母は黙つて微笑んでいた。私は伯父さんと伯母さんは仲がいいんだなと思つた。神社にお参りした後、海辺の浜で貝殻を拾つたりしたことが微かに記憶に残つている。大社の町のどこかにサーカス団の一行が来ていてサーカスをしていた。人がいっぱい集まつていて背の低い私にはあまりよく見えなかつた。サーカスを見た後、伯母が「おもしろかつた？」と私に尋ねた。私はつい「あまり…」と答えてしまつた。伯母は「そんな風に言わなくても…」と寂しそうにつぶやいた。

小学4年生の新学期が始まつた頃だつたと思う。体の弱かつた伯母は、肝臓の病気が悪化して寝込んでしまつた。時々町の病院の女医さんが往診に来るようになった。客間に布団が敷かれ、その上で伯母は苦しそうに横たわつていた。

私は、病気の伯母の側に行つていいものかどうかからず、客間の入り口の廊下を行つたり来たりしていると中にいた伯父が「入つて来い」と言つたので入つて伯母の側に座つた。私が「どげなかね。」とたずねると伯母は「痛いいていけんわ」と苦しそうに答えた。私は何と言つてあげていいのかわからず黙つて座つていと伯父が「もう、いいけん出なはい」と言つた。

それから数日経つて伯母を見舞おうと思ひ部屋の前まで来た時、伯母が苦痛の中で「壮吾―、壮吾―」と東京の叔父を呼ぶ声が聞こえてきた。私は、今部屋に入つてはいけないと感じて私の部屋に引き返した。しばらくして伯父が私のところに何かを書いた小さく折つた紙を差し出し「郵便局へ行つて電報お願いします」と言つてこの紙を郵便局の人に渡してくれ。ちよつと待つちよつと、なんぼかかつたか教えてくれえけん。このお金で払つてな。」と封筒に入れたお金を手渡した。私は小さな紙片と封筒をしつかりと握り締めて3キロぐらい離れた町の郵便局へ向かつて毎日学校に通う道を小走りで走つた。

郵便局にはおじさんが一人仕事をしていた。私が息を切らしながら「電報お願いします。」と言うと、おじさんはすぐに紙片を受取り「すぐ打ちますけん、ここで待つちよつてね。」とやさしく話してくれた。郵便局のおじさんは、壁際に置いてある机に向かつて座り、ツツウ、ツウ、トン、ツウ、トンと電報を打ち始めた。打電はすぐ終わりおじさんが電文を私に見せた。電報用紙には、「キミノ キトク スグカエレ」と打たれてあつた。来る時は、早く郵便局に行かなければと無我夢中だったので、紙片に何と書いてあるかなど考える暇もなかつた。郵便局のおじさんに電報を見せられて初めて電文を知つたのだつた。電報の代金を支払い帰りの道を急ぎながら、伯母は死ぬのかもしれないんだなと思つた。

次の日の朝、町の女医さんが来た。伯父と私は伯母をじつと見守つていた。伯母の呼吸がだんだん弱くなつて行つた。女医さんが細い注射の針を伯母の左胸の辺りに刺した。伯母は微かに顔をしかめた。しばらく伯母の腕の脈をとつていた女医さんが伯母の臨終を告げた。女医さんが帰り、私は居たたまれなくなつて部屋を出た。

振り返ると伯父は伯母の胸元でうなだれて泣いていた。

「東京の叔父さんは、間に合わなかつたなあ」と思いながら庭を行ったり来たりしている、叔父が道路から門の入り口を駆け上がって来た。叔父は私を見るなり泣きそうな顔で「死んだ？」と私に聞いた。私は答えることができず黙っていた。叔父は察したように急いで玄関から中に入って行った。

お通夜の日、近所のおばさん達は「和美さん、伯母さんが亡くなあなさって、ほんにいけんだったねえ。かわいそうにねえ。」と涙を流して私を慰めてくれた。

私は暗い気持ちになつていたが、心の内で「私は、なぜ涙が出ないんだろう。」と自分に問いかけていた。

伯母が亡くなり伯父と二人の生活が始まった。伯父は朝食を作つて私に食べさせ、お弁当にご飯を詰めて私に渡してくれた。私はそれに食卓の上に出ているおかずを入れてお弁当を作り学校に通つた。いつ頃から私の日課になったのかはよく覚えて

いないが、学校が終わって家に帰るとすぐ普段着に着替え、牛の食べる秣（まぐさ）を刈りに田んぼの土手に出かけて行つた。鎌（かま）と草を束ねるわら束と草を背負つて帰る縄を持って、前日に草を刈り残した田んぼの土手に行つて私が背負つて帰れるくらいの草を刈つた。だいたい直径20センチぐらいの大きさの草の束を5、6把作ると家まで背負つて帰ることができた。家を出るのが遅くなると夕方薄暗くなることもあつたが、あせる気持ちもなくいつも淡々として私の日課を果たした。道路の近くにある田んぼの土手で草を刈っていると、時々道を通りかかる近所のおばさんが「和美さん、よう世話あやかっしやあねえ」とか「まあまあ、和美さん、偉いねえ。まむしが出えかもしれんけん氣い付けなはいよ。」などと声をかけて励ましてくれた。

たぶん夏休みの期間だつたと思う。その頃高校生だつた鳥上の従姉がしばらくの間伯父の手伝いに来ていたが、すぐいなくなつていた。

秋の稲刈りの時期になると、私は刈り残された田んぼの稲刈りをしたり、田んぼ

の中に伯父が組み立てたやぐらに稲の束を干すのを手伝ったりした。

小学4年生の11月に入った頃だった。毎年楽しみにしている学芸会の練習がもうすぐ始まるうとしていた。朝いつもの時間に目が覚めて起き上がろうとすると頭ががんがんと痛く、のどが渴いてどうしようもないので寝巻きのままで台所に水を飲みに行った。コップに水を汲んで飲もうとしているところへ伯父が外から帰って来た。「どげした?」「頭が痛あてのどが渴いて…」伯父はびっくりして「ばか!水なんか飲むな。今、湯わかしちやあけん、寝て待つちよれ。」と言った。寝床に入るとすぐ伯父が体温計を持ってきた。熱を測ると39度2分あった。あまりの高熱に伯父は驚いた様子で「学校へ連絡しちよけん、今日は休め。」と言つて部屋を出て行った。しばらくして伯父が「熱があつて食べたあなあても食べにやあいけんぞ。」と言つて茶碗に梅干しの入ったおかゆと皿に入れた半熟の卵をお膳に載せて持ってきた。私は、全然食べたくなかったが、食べなくては元気にならないと思ひ無理や

りに飲み込んだ。飲み込んだものは、消化する力がないのでトイレに行った時全部もどしてしまった。

熱にうなされながらはつと気がつく、と、寝床の傍に母が座っていた。その頃母は、鳥上の診療所で保健婦をしていたが、熱を出して寝込んだ私のことを心配して伯父が知らせたのだろう。母は、手に大きな注射器を持っていた。私が目を覚ましたのを見て、「おしりにこの注射をすーと熱が下がーけんね。おしり出して。」とやさしく静かに言った。注射は痛くもなくすぐ終わった。その後私はまたすぐ眠ってしまった。

私が目を覚ましたのは、陽が傾きかけた頃だった。傍にはもう母の姿はなく部屋の中は静まり返っていた。熱が下がったのか、お腹がすいてきた。起き上がってひよつと枕元の方を見ると、そこには丸い缶入りの粉ミルクが置いてあった。母がそつと置いて行つたんだなと思った。粉ミルクはお湯に溶かして飲むものだと思つていたが、すぐお湯を沸かすこともできないしどうしようかなと思ひながらミルクの

缶の蓋を開けてみた。中には小さいアルミのスプーンが入っていた。私はそのスプーンで粉ミルクをすくい上げてそのまま口の中に入れた。粉ミルクは舌の上で溶けて甘い濃いミルクになった。あまりにおいしかったので、スプーンに山盛りにした粉ミルクを立て続けに3、4杯そのまま食べてしまったのだった。

数日経つても微熱が続き、1ヶ月以上も学校を欠席してしまった。その間4年生のクラスの担任の先生や、友達がお見舞いに来てくれた。担任の女の先生は私を見るなり驚いたような表情で「まあ、和美ちゃん。やせてしまつて…」と言つた。私は内心「私が先生だったら、お見舞いに来てそんな風には言わないなあ。」と思つていた。クラスの友達は、私を元氣付けようと面白い話をしたりして私を笑わせてくれた。友達の心遣いがうれしかった。そんな友達に病気が治つてからも何のお礼もできなかつたことが今思うと心残りである。

起き上がると体がふらつき、なかなか元氣を回復しないので病氣になつて1ヶ月が過ぎた頃、母が来て私を松江の日赤病院に連れて行つた。いろいろな検査をした

結果、診察した医師は「どこも悪くはないですよ。もう学校に行っても大丈夫だよ。もう少し栄養を取ってね。」と言った。体がふらつくのは栄養が足りなかったせいのようにだった。高熱が出たのはその時流行っていたインフルエンザにかかったからであろう。

伯父は私が5年生になった頃には、家の牛舎で飼っていた牛を他の飼ってくれる農家の人に預け、代わりに乳離れしたばかりの雌山羊の子を1匹連れてきた。子山羊は昼間は、田んぼの土手に杭（くい）を打って紐でつながれ、食べられる範囲の草をきれいに食べ尽くした。私が学校から早く帰った時は、草のあるところへ移動し、もう一度杭を打ちなおして草を食べさせた。夕方薄暗くなった頃、家に山羊を連れて帰るのが私の日課となった。冬になり、土手の草が枯れてなくなると、私は伯父の示す近くの山に行つて、草刈りをした時と同じように笹を刈った。山道を通りかかる人は誰もおらず、いつも辺りはしーんとしていたが心は落ち着いていて寂

しいと思ったことはなかった。笹を背負って家に帰り、子山羊に笹葉を差し出すとほおをふくらませておいしそうに食べた。

雌山羊はすぐに成長し思春期を迎えると、伯父は雄山羊のいる農家に家の雌山羊を連れて行って帰ってきた。やがて雌山羊は2匹の子山羊を生んだ。子山羊は母山羊のお腹に大きく膨らんでぶら下がっている乳房に顔を埋めて盛んにお乳を飲んでた。子山羊はお母さん山羊のお乳をいっぱい飲んでどんどん成長した。1匹は頭のとつぺんに角が生え始め、もう1匹は角が生えなかった。お母さん山羊には角がないから、角がない方が雌で、角がある方が雄なんだなと思った。

ある日学校から帰って山羊小屋に行ってみると、2匹の子山羊の姿がなかった。母山羊は小屋の仕切りの間から首を出して「メーへへ、メーへへ」と鳴いて子山羊を探している様子だった。子山羊がそろそろ乳離れする頃になったので伯父がどこかに連れて行ったのだろうと思った。

次の日から山羊の乳しぼりが始まった。私は伯父が板を組み合わせて作った、山

羊が一匹ちょうど入るくらいの大きさの囲いの中に山羊を入れ、乳房の下に絞った乳を入れる小さなバケツを置いた。山羊が後ろ足をバケツに突つ込まないように後ろ足の前に横からつるされた板で覆いを作った。

山羊は乳を絞り始めると始めの頃はおとなしくしているが、急に暴れ出してせつかくたまりかけたバケツの乳を引っくり返してしまい、泣きたい気持ちになつたこともたびたびあつた。絞った乳を伯父に渡すと、それを七輪の上で一度沸騰させてから冷まして3合瓶に入れ、それを手で持てるように上手に小風呂敷に包んで私に渡した。私はそれを朝、学校に行く時に町まで持つて出て、途中で山羊乳を頼んだ人の家に届けた。玄関を入つて「おはようございます。山羊乳持つて来ました。今日は沸かしてあります。」と言つて上がり口の板敷きに置いた後学校へ向かつた。学校の帰りには、朝、山羊乳を届けた家に寄つて玄関の板敷きに出してある空の瓶を受取つて家に帰つた。

伯父が朝、忙しくて絞つた乳を沸かさないでそのまま持つて行つた時は、「今日

は沸かして飲んでください。」と伝えて山羊乳の入った瓶を渡した。どのくらいの期間山羊乳を配達したかは、よく覚えていないが、2、3ヶ月は続いたと思う。月末に配達した山羊乳の代金を受取って帰り、伯父に渡すと「これは和美のお小遣いにやあけん、貯金しちよいて好きなもんを買え。」と言って代金の全部を私に差し出した。私は内心驚いて「全部私がもらっていいのかな」と思いながら伯父の顔をじつと見た。「よう手伝ってくれたけんな。褒美にやあよ。」と伯父は言った。私はうれしくなって笑顔で「はい」と答えて代金を受け取った。

私はご褒美にもらった山羊乳の代金を貯金箱に入れ、大切に保管しておいて学校で使う文房具や、にわか雨に備えて携帯用のビニールの雨合羽などを買った。

小学6年生の修学旅行は宮島、広島、岡山だったがその時のことは、宮島の真つ赤なもみじの葉がきれいだったこと、赤い鳥居の前で記念撮影をしたこと、岡山の池田牧場で椅子に座った池田厚子様を真ん中にして写真を撮ったことぐらいしか記

憶に残っていない。担任の先生は5年生の時から持ち上がりの男の先生だったが、生徒一人一人をよく観て指導してくれる思いやりのある優しい先生だった。先生は私には何も言わなかったが、私が伯父と二人で暮らしていることを知っていて、私が寂しそうに見えるらしくいつも気にかけていて伯父とはよく連絡が取れているようだった。

先生は作文の時間に日常生活について書いた作文が、他の生徒の作文とは違うことにも心を留め、私の書いた作文を作文コンクールに出したりした。一度ラジオの放送番組で私の書いた作文が放送され、教室に取り付けられたスピーカーでそれを聞いたことがあった。放送は「ふるさとからの便り」のような形式に短縮され入選した他の生徒の作文もいっしょに放送されたので、どこからどこまでが私の書いた作文なのかよく分からないまますぐ終わってしまった。私の書いた作文だとはつきり分かったのは、「おじさんは、まだ青い実り始めたばかりの稲の穂を一粒取ってかんでみて、『うん、いい実だ。今年は豊作になるぞ。』とうれしそうに言いました。」

というところだった。

毎年、小学校では各学年毎にクラス担任の先生の家庭訪問が行われた。先生は私の住んでいる地区の家庭訪問に回る日、授業が終わった後「今日は、和美さんの家に行く日だね。先に1軒回るけどすぐ終わるから一緒に行こうや。」と声をかけてくれた。うれしかった。

校庭で待っていると先生が自転車を引いて出て来た。先生は自転車を引いたまま町の中を私と並んで歩きながらいろいろ話しかけてくれた。私がいつも学校に通う道とは反対の方向に進んで行き、町はずれにさしかかると先生は「後ろに乗うなさい。」と言って私のかばんを受け取って前の荷かごに入れた。私は後ろの荷台の上にもたがって乗ると先生は自転車に乗ってこぎ始めた。先生はまだ30代ぐらいの若い先生だったが、私は後ろの荷台で自転車をこぐ先生の後ろ姿を見ながら、何だかお父さんの自転車に乗せてもらっているような温もりを感じていた。

先生が家庭訪問をする1軒目の家は田んぼの間の細い道を入ったところにあつ

た。私が道路の端に立って待っていると先生はすぐに出てきた。それから坂道やでこぼこ道は自転車を降りて歩き、なだらかな道になると自転車に乗っていつも帰る道とは反対の方向から私の家にたどり着いた。先生は、応接間に入り伯父としばらく話をして帰って行った。

小学6年生の時の担任の先生の思い出は、思いやりの深い優しい先生として、また父を知らない私にとってはお父さんのようなイメージとして私の心に刻まれている。

私が中学1年生になった頃、鳥上の診療所で働いていた母は、仕事を辞めて三成の伯父の家に住むようになっていた。その頃母は、三成町の民生委員をしていたし、家にいる時は野良仕事をしていたので食事の時以外はほとんど顔を合わせることはなかった。その頃の母との思い出と言えば、裏の山や道路を上って2キロぐらい離れた山に竹の子やきのこ取りに行ったことである。竹の子取りは、竹の子を入れる

大きな麻袋（確か斗米袋（とまいぶくろ）と呼んでいたようだが）と小さな鍬を持って山の竹やぶに行き、主に2、30センチくらいに伸びた竹の子を探して取った。竹の子が見つかるのと鍬で根つこのところの土を掘り、生え際からえぐり取った。竹の子は、太きの太いのや細いのがあったが、7、8本くらい集まるとそれを麻袋に入れ、たいてい母が背負って家に帰った。秋のきのこ採りでは、主に紅茸、平茸、ねずみ茸、なめ茸などが取れた。

山で採ってきたばかりの茸を煮物にしたり、汁物に入れたりして母が作ってくれた料理は、とつてもおいしくて今もその味が忘れられない。

中学生になった頃には、家で山羊も飼わなくなり、母もいるので農繁期以外は家に帰ってからする仕事は少なくなつた。時間に余裕ができた私は放課後も学校に残つてクラスの友達と遊んだり、帰りに友達の家に寄つて遊んだりした。

親しく遊んだクラスの友達は、とても明るく、ひょうきんな友もいて先生方のあ

だ名を付けたり、まねをしたりしては、みんな転げまわるほどよく笑ったものだった。ちょうど箸が転んでもおかしい年頃だというのが、学校のろうかで先生とすれ違っただけでもなんだかおかしくなってしまうのだった。

ある日の放課後、校舎の庭の坂を少し降りたところに作られた運動場で友達と遊んでいて何がおかしかったのかは覚えていないがみんなお腹をかかえて笑っていた。その時、校舎の玄関を出て来た国語の先生が私達が大笑いしているのを見て、笑いを誘われたらしく先生も笑いながら私達のいる右下の方を見ながら歩を進めていた。校舎の庭には、まだ丈の低い何本かの庭木が植えられていた。笑っている私達の方に気を取られて横を向いたまま歩いていた先生が、急にスパッと庭の端の方に植えられた庭木にぶち当たってよろめいたのだ。それを見ていた私達は、笑いがさらに笑いを呼んで校庭を転げまわって大笑いしたのだった。

親しい友達は、三成の町から3キロも離れた私の家にも遊びに来てくれたことがあった。友達が遊びに来てくれることはうれしかったが、突然友達を連れてきて母

が友達に出すおやつがなくて困るだろうなと心の片隅で心配している私がいて、心の底から楽しい気分にはなれなかった。

中学3年生の1学期が終わりに近づいた頃だった。担任の先生から私に放課後、職員室に来るようにという知らせがあった。いったい何なんだろうとちよつと不安な面持ちで職員室に入ると、担任の先生から「今から三成の役場に行きなさい。安部さんは表彰されるそうだよ。」と言われ、表彰されるようなことをした覚えがないので「ひょうしょうしよう？」と言って私がきよんとしていると「いいことをした時に褒めてもらうことだよ。」と先生は説明した。私はまだ納得がいかず「私、何にもいいことなんかしていませんけど…」先生もそれ以上説明に困ったらしく「とにかく帰る仕度をしてすぐ役場に行きなさい。表彰式が終わったらまっすぐ家に帰っていいよ。」と私を促した。

役場に着くと2階の会議室に案内された。会議室の入り口のところに千原英一仁

多町長が立っていて表彰を受けに来る人を待っている様子だった。案内の人が町長に私の名前を告げると、町長は「おう、安部君か。どうぞこっちの椅子に座って：。」と空いている椅子の方に案内してくれた。そこには数人の男子生徒やお母さん方が神妙な顔つきで椅子に腰掛けていた。

表彰式が始まり仁多町長からお話があったが、どんなお話だったのか覚えていない。表彰状を受け取る時も、私としては毎日当たり前のことをしているだけで特に善い行いをしていているとは思っていないので、どうして私がここに立っているのか不思議な気持ちだった。表彰式の後、会議室で記念撮影をした。私の中学時代のアルバムに貼られたその時の写真を見ると、後ろの黒板に「善行児童及び母の表彰記念 昭三四・七・一六」と記されている。写真の前列はお母さん方が3人と男子生徒が2人と私の3人の児童が椅子に腰掛け、後列に千原町長を中心に役場の人が両側に2人ずつの5人が立ったまま写っている。

表彰式で表彰状と共にもらった記念品は当時の島根県知事田部長右衛門氏直筆の

色紙だった。それはのしの付いた紙袋に入っていたので何と書いてあるのかすぐには分からなかった。記念撮影も終わったので帰ろうと思ひ会議室を出ようとした時、千原町長が私を呼び止めて「田部県知事さんの色紙に何と書いてあった？」と尋ねた。私もまだ袋を開けて見ていなかったたのでその場ですぐ開けた。色紙には毛筆の達筆で次のように書いてあった。

高遠

為安部和美君

昭和三十四年二月

島根県知事 田部長右衛門

私は、胸がジーンと熱くなった。私にふさわしい言葉を書いて下さったと思ったからだ。『これから私の行く道は、高くて遠いんだ。これから始まるんだ。これからがんばらなくては。』と心の中で自分に言い聞かせた。

千原町長も「安部君に合っていたいい言葉をもらったね。がんばってね。」と励ましてくれたのだった。その時私は、はつと気が付いた。「私は褒められたのではなく、励ましてもらったのだ。」と。

表彰状にはどんなことが記されていたのか、よく覚えていなかったが、母が卒業証書と共に丸い筒に入れて大切にしまっておいてくれたので、今それを取り出して見た。それにはやはり達筆の毛筆で次のように書されていた。

表彰状

仁多町立三成中学校三年A組

安部和美殿

あなたは勤勉力行学業成績抜群であり又自主的精神に富み責任を重んじよく級友を善導し家庭に於てはよく父母につかへ家事の手伝いに精出すなどの模範であります

よって昭和三十四年度児童福祉週間にあたり記念品を贈り表彰します

昭和三十四年五月五日

仁多町長 千原英一

表彰式のあつた日、家に帰つて表彰状と田部県知事からの色紙を母に見せるとそれをじつと見て涙ぐんでいた。

伯父は大変な喜びようで、次の日だったか、どこにあつたのか今まで見たこともなかつたカメラを持ち出して来て記念写真を撮ろうと言つた。庭の入り口の門の前で表彰状と色紙を持つて立つている私の写真を何枚も撮つた。伯父は色紙を入れる額縁を買つてくるようにといくらからお金を私に渡した。私は町の文房具屋さんで色紙がちょうど入りそうな四角い黒い縁の額縁を買つて帰つた。伯父はそれを見て「そりゃ、この色紙を入れーにゃー、あんまー安つぽいな。もつといいのを買つて来い。」と言つた。たぶん次の日だったであらう。今度は丸い茶色い縁でベージュ色に金粉を散りばめたような台紙に紫色の総（ふさ）の付いたりつばな額縁に取り替えてもらつて家に持つて帰つた。「うん。いいぞ。」伯父は満足そうだった。母は「ちよつと大き過ぎーわ」と笑い声で言つていた。

昭和35年3月、三成中学校を卒業した私は、木次の町で開業医をしている叔父の要望で4月より三刀屋高校に通うことになった。今までとは全く違う環境での生活に不安や戸惑いもあったが、母の妹の叔母が優しく接してくれたので安心して過ごすことができた。また、学校の授業で試験がない時や、試験が終わった時は、週末に三成に帰って過ごすこともあった。

高校入学当初は、クラスメイトに一人もなじみがなくて一人ぼっちだったが、入学して1ヶ月くらい経った頃、同じクラスに松江の高校から転校して来た一人の女子高生に出会った。初めて会った時からお互いに親しみを感じてどちらからともなく近づいて親しくなった。彼女はお父さんの転勤のため三刀屋高校に転校したが、彼女の住む公舎も、木次の町にあつて私の住んでいる叔母の家から徒歩で15分くらいのところにあつた。私は彼女の家によく遊びに行くようになった。彼女には中学生の妹が一人いて両親と4人家族だった。私が行くといつも彼女のお母さんが温かく迎えてくれた。同じ友達のように一緒に話したり、笑ったりして私を楽し

ませてくれた。その時に感じた彼女の家庭の温もりは今でも忘れることができない。彼女は三刀屋高校に1年間だけいて、お父さんの転勤でまた松江に帰って行った。高校2年生になると、クラスは進学組と就職組に分けられ、進学組は完全に受験体制の授業に入った。進学組は試験の成績や志望の大学によりさらにクラスが分けられ受験勉強に明け暮れる日々が続くようになった。週末に時々帰っていた三成にも時間に余裕がなく勉強だけで精一杯の私には帰りたくてもあまり帰れなくなってしまうた。それでも試験が終わった後など、急に帰りたくなって三成に帰ると、伯父が喜んで迎えてくれた。

その頃母は、木次の叔父の病院で看護婦として働いていた。二人の兄は東京の大学に入学し学資を作るためにも働かなければならなかったのだ。

高校3年生になるといよいよ受験勉強も本番を迎え、夏休みも補習授業があったりして三成に帰ることがますます少なくなっていた。

高校3年生の11月初め頃だったと思う。受験勉強も最後の準備に入っていて受験

生は一時も惜しんで机に向かつている頃だった。

週末になって私は急に三成に帰りたくなつた。木次の叔父の病院で働いていた母に三成に行つて来ることを告げ、土曜日の午後、電車で三成に帰つた。

伯父は、帰つて来るとは思つていなかったのに帰つて来た私を見ると「おお、帰つて来てくれたか。」と大喜びだった。伯父はこたつのある部屋に台所から七輪を運んで来て「夕飯に卵どんぶり作つてやーけんな。」と言つてせつせと仕度を始めた。そんな伯父の姿を見ながら「私が久しぶりに帰つて来たのがそんなにうれしかったんだな。帰つて来てよかつた。」と思つたのだった。

三成に帰ると月曜日の朝はいつもまだ薄暗いうちに起きて高校の授業に間に合うように三成駅から早朝の電車に乗つて行く。家から駅までは、一人で近道の山の細道を通り抜けて駅に向かう。

いつもなら庭先きか、家の前の道路で私を見送る伯父が、なぜかその日は私の後からずつとついて来るので、不思議に思つて振り返ると「山道は危ないけん、駅の

近くまで送ってやーよ。」と言った。私は心の中で「すまないな」と思いながら話しかける話題もないので黙って先にたつて歩いて行つた。

曲がりくねつた山の坂道を上つたり下つたりして、林の間の暗い道を通り過ぎると視界が開け人家が一軒見えてきた。そこから駅はもうすぐだった。なだらかな小道にさしかかった時、私は道の真ん中にあつたくぼみの水溜りに突然ビシャンと片足を突っ込んでしまった。伯父は「もう明るうなつちように、なしてだ。前をよう見て歩かにやあ……」と優しい声で私をとがめた。私は前をよく見て歩いていたつもりだし、昨夜雨は降らなかつたと思うのにどうして水溜りなんかあるのだろうと不思議に思つた。さいわい水溜りはあまり深くなかつたので、靴が濡れた程度で水は中まで入っていないかつた。伯父はその様子を確かめると「わしは、ここで帰えけんな。氣いつけてな。」と言うと、今来た道を急いで引き返して行つた。私は駅の方に向かつて歩きながら一度振り返つて見たが、曲がりくねつた山道には、伯父の姿は見えなかつた。

木次駅までの切符を買い電車に乗った。電車は出勤する人達でかなり混み合っていた。電車が動き出してしばらく経った頃だった。前方の運転台のある方向から車掌さんが何か言いながら人の間を縫ってこちらに近づいてくるのが見えた。

立つてつり革につかまっていた私の耳にだんだん近づく車掌さんの声が聞こえてきた。

「三成の駅で財布をお忘れの方、いませんか？茶色の小さい財布ですが……。椅子の上に置いてありました。」

車掌さんの声を聞いて私は「財布はお金を払ったらすぐかばんにしまうものなのに、誰が椅子の上なんか置き忘れ……？」と思いかけて途中で「三成駅」「茶色の小さな財布」「椅子の上」という単語を反芻して見てはつとした。私の財布も茶色だし今日は切符を買った後、財布をかばんに入れた記憶がないのだ。私はかばんを開けて財布を捜した。ない！あわてて車掌さん呼び止めて「あのう、私の財布ですけど。」と言った。車掌さんは私を疑いもせず「ああ、そうですか。」と握って

いた財布を差し出し「中を確かめて見てください。」と言った。いくら入っていたかは覚えていなかったが切符を買うくらいのお金しか入れていなかったの
で、「あります。ありがとうございます。」と車掌さんにお礼を言った。

「今まで一度も財布を置き忘れたことなどなかったのに、今日はどうして椅子の上なんかに置いて来たんだろう。三成にもう一度帰って来いということだろうか……。」などと考えているうちに木次駅に着いた。

次の日、午前中の授業が終わりお昼の休憩時間に入った頃だった。友達と話しをしていた私のところに職員室から伝言が届いた。木次の叔父の家から学校に電話があり、私に「急用だからすぐ木次の家に帰ってくるように」とのことだった。

すぐにバスに乗り木次の家に帰った。家に着くと母と叔父が私の帰りを待っていた。「三成の伯父さんが、倒れられたそうだけん、今すぐ出発すーけんね。車に乗
うなはい。」と叔父が言った。

すぐに医師の叔父が車を運転し、看護婦の母と私は後ろの席に乗り出発した。

車の中で母から三成の伯父のことを聞いた。今朝、近所の人が伯父に用事があるて伯父の家を訪ねたところ、いつもなら開いているはずの玄関のドアが閉まったままになっていたので、異変を感じトイレのろうかの柵を乗り越えて中に入ってみると伯父がろうかで倒れていたという。今、伯父の様子はどうか詳しいことはよく分からないとのことだった。

母の話聞いて、昨日の朝三成の駅で財布を椅子の上に置き忘れたり、近道を歩いている時、外はもう明るいのに水溜りに足を突っ込んだりして、いつもの私とは違って何か変だなと思ったことや、私が三成に帰った時の伯父の様子がいつもと違う喜びようで、卵どんぶりのご馳走を作ってくれたこと、早朝、駅の近くまで見送ってくれたことなど思い返して見て、やはり虫の知らせだったのかとじつと黙って考えていた。

三成の家に着くと、伯父はこたつのある部屋に服のまま寝かされていた。知らせ

を受けたらしく鳥上の叔母が来ていた。

伯父は頭の片方が青紫色に腫れていて低くいびぎをかいていた。脳出血らしかった。木次の叔父は、伯父の様子を診てもう助からないからしばらくそのまま見守つてあげるようにと私達に伝えて木次へ帰つて行つた。

伯父のいびぎがだんだん小さくなつて行つた。私はしばらく伯父の手首の親指の付け根に指を当てて脈拍を確かめていた。脈拍もだんだん弱くなり指で感じられなくなつて行つた。夕方5時過ぎ伯父は、私達3人に見守られて息を引きとつた。

伯父の葬儀の日、僧侶の読経が終わりに近づいた頃だつたと思う。今まで気を張り詰めていて何も考える事ができなかった私の心に突然、言いような悲しみが一気に押し寄せて来た。私は声を上げておいおいと泣いた。前の方に座つていた母や鳥上の叔母が私の泣き声に驚いて振り返つたほどだったが、自分で抑えようとしても抑えることのできない嗚咽がのどの奥の方から込み上げて来てどうすることも

できなかった。傍に誰もいない三成の家でただ独り不慮の最後を迎えなければならなかった伯父が不憫でならなかった。「傍にいてあげられなくてごめんなさい。」「今まで優しくして下さったのに、ありがたうも言えなくてごめんなさい。」伯父へのいろんな思いが重なってなかなか泣き止むことができなかった。

入棺が終わり最後のお別れに、伯父の顔を拝んだ時、安らかな笑みを浮かべているように見えて慰められ、私の悲しみは徐々に和らいで行ったのだった。

私が三成に来て、伯母がまだ元気だった頃、伯父はよく韓国にいた頃のことを懐かしそうに話していた。どんな話だったかはよく覚えていないが韓国で公立学校の校長をしていた伯父だったので、学校の子供達の話をする時は、まるで自分の息子の話をするかのように愛情たっぷりユーマアを交えて話していた。また韓国の各地を旅行して楽しかったことなどもよく話していた。

終戦後、三成に帰って来てからは、長男として両親を支え、慣れない手で農業を

始めたのだった。

昭和24年1月に島根県知事の名で送られて来た父の「死亡告知書」によつて父の戦死が明らかになつた後、伯父は父の葬儀にお寺より二人の僧侶を家に招いて盛大に行つた。その時私は5歳でまだ中野にいる頃だったが、中野の伯母といつしよに三成に来て葬式に参加したことをぼんやりと覚えてゐる。

伯父は、仏教に信心があつて法事の日は、お寺から一晩泊まりで和尚さんを招き、夜は和尚さんの説教を熱心に聞き、時々質問などをしたりしていた。

父親代わりとして時には厳しく、時には優しく接しながら、私を自主性と責任感を持つた子供に育ててくれた。自分のことは顧みず、人の仕事の世話をしたり、相談に乗つたりして家でゆつくり体を休めている伯父を私は見たことがなかつた。無理をし続けた結果が、伯父のこの世の最後を早めたのかも知れないが、それもまた伯父の背負つて生まれた運命として受け止めて、今はただ伯父への深い感謝の思いを捧げたい。

これまで『我が生い立ちの記』を書き進めてきた私も、もう今までの人生よりもこれから歩む人生の方が短くなつてしまつたが、私の向かう目的地は今も昔も変わることはない。向かう目的地は、人それぞれ異なるであらう。たとえその目的地が皆と同じで、まっすぐ向こうにあつたとしても、他の人なら1日で行ける道を、わざわざ遠回りして何日もかけてやつとたどり着くような不器用な歩みしかできないが、それだけに目的地に着いた時の喜びと感謝は誰よりも大きいのだと、自分の生き方を自負して歩んで来た。これからもまた同じように不器用な歩みを続けながら目的地に向かつて進んで行くこうとしている私である。

私の向かう目的地は、抽象的で人が皆求めて行く目的地とはだいぶ違つているのかもしれないが、私が求め続け、天が私に与えてくれた我が道と信じてこれからも希望を失わず前向きに歩みを進めて行きたいと願つてゐる。

野山に咲く花のように

野山にひっそりと咲く花は

人に「お前は美しい」とほめられもせず

認められもせず

ただ静かに咲いて

旅する人の心をなごませ

悩める人の心をなぐさめてくれる

激しい風雨にさらされる日も

かんかん照りの暑い日も

いつもじっと黙って耐えて

その葉を大空に向かって力いっぱい広げ

その根を地中に伸ばしてしっかりと張り
ひっそりと可憐な花を見事に咲かせる

その野山に咲く花のように

いつも静かにほほえんで

ほのかな温もりを与えてくれる

そういう者に私はなりたい

安部和美 (1996. 5. 20)

上記の詩は私が韓国外国語大学にいる頃、宮沢賢治の生誕100年を記念して「雨ニモマケズ」の詩の最後の節「サウイフモノニ　ワタシハナリタイ（そういう者に私はなりたい）」をテーマにして学生達が作った詩集に載せた詩である。その詩で歌った「そういう者に私はなりたい」それが私の目指す目標なのである。その

目的地にたどり着くことは私にはできないかもしれないが、一歩一歩踏みしめて近づいて行きたいと今も思っている。

(平成21年3月31日)

『我が生い立ちの記』にそえて

安井 杲重

和美さんの知らないお父様を私が初めて見たのは、小学校の一年生だったと思う。乳歯が生え代わる時に、父が三成の安部医院の隣りにあった福田齒科医院に私を連れて行った。父は受け付けだけしておいて私を残して安部医院へ行っていた。

歯医者が終わったら、お父様と父が窓からのぞいて見て迎えに来てくれて多分お茶など飲んで帰ったと思う。

安部家も佐佐木家も同じように教育熱心な家であったがあまり裕福だとは言えなかったと思う。その中で子供に高等教育を受けさせるのは大変であっただろう。でも、男の子は自立しなくてはならないので、長男は財産を受け継ぐから、次男以下には大学までという信念でやってこれたと、私の祖母は話してくれた。和美さんの

お父様の母上は佐々木家から嫁いだので私の祖父と兄妹である故、子供の年頃も同じだから同じ思いだったと思う。

富之助さんと私の伯父千代雄は、同年で二人共松江中学（その頃県下に松江に一校だけ、農林学校も松江に一校だけしかなく、後になり大社に無試験中学、益田に無試験農林学校が一校だけできたものだそうだ）で同窓であった。卒業して二人共に慈恵医大をめざして受験したが、富之助さんは受かり、千代雄さんは失敗して一年浪人して慶応へ入った。千代雄さんは佐佐木の兄弟で一番出来がよかったはずだったのに失敗したという。他の兄弟は皆農林を出て次男は水戸の工業大学、四男は早稲田を出ているが、いかに慈恵が難しかったか分かる気がした。三成のおばあさんが馬木の佐佐木へ泊りに来られると祖母と子供を育てる時の学資の苦労話をされるのを子供心に覚えている。

昭和16年の夏早朝、祖母のただならぬ声に起こされた。父が大変だから母を呼んで帰れといういつついで、田んぼで草刈りをしていた母を呼んで帰ったら父が台所

で倒れていた。母が富山の置き薬を何か飲ませたら気がついていったんは安心したが、その日は小学校の遠足で一日中父のことが心配で楽しくなかった。夕方三成から富之助さんが看護婦さんを連れて往診して下さった。そして私が薬をもらいに行くという大役で、夜、その車で三成に行った。その夜は三成で泊まってあくる朝早くおばあさんに起こされ、三成の駅まで送ってもらい生まれて初めて一人で汽車に乗り、八川から歩いて学校へ行き、薬を持って家へ帰った記憶がある。父は腎臓が悪くなっていて色々薬で治療してもらったがよくならず入院ということになった。父は松江の日赤病院へ入ったが、薬も内容を全部富之助さんから聞いて知っていて、日赤も同じだったのもう治らないと覚悟したようだ。後に父が亡くなってからその時に書いた遺書の様なものが出てきたが、子供を残して亡くなる親の気持ちは皆同じだと思う。

ただ、父はその時日赤に入院している他の患者さんから「大阪に絶食して治す病院がある」と聞いたそうで、自分一人の意志でそこへ転院し、絶食で治して元氣

になつて帰つてきた。そして富之助さんと一緒に昭和19年3月に召集されて陸軍少尉として出征したが幸い内地勤務だったので帰つて来た。父は兄弟が集まつた時等、「富さんが居たらなあ」「三成の兄弟で富さんが一番よかつたなあ」と話していた事を聞いたことがある。後に馬木の高橋というお医者さんが開業された時に三成の倉の中から残つていた医療器具を用立てたと聞く。

和美さんのお母さんに初めてお会いしたのは、私が横田高校の学生の頃、時々土日に馬木へ帰らず（横田で下宿していた故）鳥上へ行つた時だった。

和美さんの二人の兄さんや須川の子供達と一緒にいるお母さんを見て何てきれいなしつかりしたおばさんだろうと、多くは語られなかつたが、あこがれの様な気持ちを抱いた。そして馬木の家族は、「女親二人、子供を連れて気疲れな事ばかりだろうが、上手にやって居られる」と親達と話していた記憶がある。

私の中野へ嫁ぐと決まつた後だつたと思うが、鳥上に行った時、お母様から半衿を頂いた。ピンクの地色にきれいな花柄がついている。まだ大切にしまっている。

何よりもお母様にお世話になり、今でも感謝している事は、私が中野へ嫁いで1年3ヶ月が経った時のことである。5月13日午前11時頃だったと思う。

庭先の田んぼで義母と田植えをしている時、母が何か気持ちが悪いと言い出したので、すぐ田から上がって納屋の縁側へ腰をおろしてもらい、その頃はまだ田んぼへ入るのは素足だったから足を洗い、主治医からももらった薬を持って来いと自分で指示して薬を飲んだが、その内に意識が無くなって行つた。すぐお医者さんに来てもらったが、残念なことに意識がもどることなく亡くなってしまふことになつた。

三成の伯父様とお母様がすぐ来て下さつて、お母様には最後まで看病して頂いて本当に心強くて助かつた。あの時の御恩は生涯忘れられない。その後、法事等終わつて、和美さんには伯父様、私には義父に「自分に縁のある嫁をと言つて望まれたのに、こんなにすぐ亡くなつてしまふのなら、他人の嫁でよかつたのに」とぐちを言つたら、父の答は「死んだ後も法事やら何やら後からやっぱり拜んでもらうのに縁のある者にしてもらいたいからなあ」と聞いて、「なる程そうであつたか、それ

なら私がさせて頂こう」と亡くなられた仏様のおかげと感謝して暮らさせて頂いている。

和美さんの中野での思い出を読ませて頂いて亡き父母も喜んでいいると思います。そして昨年、立派になった兄さんや和美さんが墓参りに来て下さりこんなにうれしい事はありませんでした。もう生涯会う事はないのかと思っていたのに色々話せて本当にうれしかったです。三成のおじ様は会うたびに、和美、和美と自慢しておられたのを思い出します。そしてお母さんの「楽しい人生だった」の言葉には感動しました。あれだけ他人の中で色々気をつかって心の休まる日はなかっただろうと私は思っていたのに、この様な言葉が出るなんて、やっぱり尊敬しました。でも、最後に子供に看取られて人生を終えられてよかったですね。

(平成21年4月10日)

あとがき

平成20年4月にお墓参りのため故郷島根に帰省してからちようど1年が経つてや
つと『我が生い立ちの記』を書き終えることができた。

私がこの書を書く直接のきっかけとなったのは、帰省してお墓参りを済ませ東京
に帰ってから、三刀屋町坂本の安井杲重さん宅にお礼の電話をした時、杲重さんが
「和美さんに会えて、昔の思い出話が聞けてよかった」ことなど話されたあと終戦
後のあの頃、皆が苦勞したけれど「お母さんや和美さんのような生き方をした人は
めずらしいと思う。その頃のことを知る人もだんだん少なくなつて行くし、お母さ
んのことや和美さんの思い出など書いてみるといい」と勧める励ましの言葉をいた
だいたことだった。

私がまだ韓国にいる頃、夏休みや冬休みに帰国した時、母がぼつりぼつりと語る昔の思い出を聞きながら、「お母さんのこと書いてあげたいな」と思っただけが、自分の論文を書くだけで精一杯でそのままになってしまっていた。

母自身も、あそか病院を退職したら自分の一代記を書いてみたいという思いを持っていたようで、ソウルにいる私宛に届いた1983年4月9日付けの手紙に次のように書かれている。

(前文略) 退職後9日も過ぎましたけど色々と手続きやら、外の仕事がありまして忙しいです。(中略) まだ落着いて家の中の片付も出来ないです。

私の一代記も何時になりますか？ 外の仕事が付ければ内の中の片付け(十五年間もの)をせねばなりません。残り少ない人生、何時まで続く事でしょうか？

ソウルでこの手紙を受取った時は、母が書いた「私の一代記も何時になります事か？」という文面を読んでもあまり気に留めることはなかったが、母が亡くなつて後、生前の母のことを思うたびに、母は実際には書けなかつたけれど、本当に自分の一代記を書いてみたかっただと思ふようになった。

悲惨な戦争で人の尊い命が失われ、家族の幸せが奪われてしまつたあの激動の時代に母もまた愛する夫を失い、家族の幸せを奪われながら、自分の運命を背負つて精一杯に生き抜いて来たその証しに自分の一代記が書きたかつたのだと気付き、私が母のことを書いてあげたいという思いがまた湧いて来た。

そんな思いを持つて島根に帰省して、杲重さんから母のことや私の子供の頃のことなど書いて見るようにという言葉に後押しされて、この書の執筆に至つた。

母の書きたかつた「一代記」は、私には書けないが、私が見てきた母や、母が私に話してくれたことなど「母の思い出」をたどることで、私の「母の一代記」としたい。そして私の「母の一代記」はまた「私の一代記」を書くことにもつながるの

で、この本の題名を『我が生い立ちの記』とすることにした。

この書を出版するに当たり、安井杲重さんに『我が生い立ちの記』を読んで何か書き添えて欲しいと原稿をお願いしたところ、私の知らない父のことや母のことなどを書いて下さった。出征する前の父の面影がしのばれて身近に優しい父を感じる事ができた。そして父が生きていたら私の家族一人一人の人生もまた変わっていただろうと思ってみた。

『我が生い立ちの記』は、人々の尊い命を奪い、家族から幸せを奪い去るような残酷で悲惨な戦争が、二度と繰り返されることのないように、そしてこの地球上に戦争のない平和な世界が一日も早く実現することを心から願いながら綴った私の手記である。

最後にこの本の出版にあたりご協力くださった安井杲重さん、仙石範子さんに厚くお礼を申し上げます。

平成21年4月18日

安部和美

我が生い立ちの記

—天国の母に捧ぐ—

安部 和美

〒135
・0016 東京都江東区東陽4
・5
・16
602